
僕達の異世界生活

真島 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕達の異世界生活

【Zコード】

Z3589S

【作者名】

真島 真

【あらすじ】

僕、櫻井 董は『かわいい』とよく言われる高校二年生（男）だ。ある日、車に撥ねられ川に落ち、気が付いたら異世界にいた。・・・・・この話は主人公が周りを巻き込みながら生活する物語。ほのぼのを目指します。

一
二
三
ふざけた名前だと自分も思つ。
だが、今の状況の方がふざけているだろう。

召喚。自分はそんな柄じゃない、確かにそばに『最強』とか『最恐』

がいたが

・・・・・この物語は主人公が面倒なことを頑張つて避けようと

する物語。

第一話『めぐら、すべてあるプロローグ』（前編）

私は、小説を書くのは初めてです。

拙い文章ですが読んでくれたら幸いです。

第一話『まやは、よくあるプロジェクト』

第一話『まやは、よくあるプロジェクト』

僕、櫻井 董（さくらい こう）がおる（せたけ）の中歩（なかゆき）てこる、高校か
らの帰り道だ。

「かおるひやーーーん！」

後ろから蹴（け）ける足音（あしゆん）と、元（もと）でせとて蹴（け）られる。

「やあんこつなつ、僕は男だっ！..」

言（い）ながら振り返（むか）る。呼びかけてきたのは、杉崎 優奈（すぎさき ゆうな）僕の幼馴染（むすな）だ。

小さこころからいつも振り回（まわ）されている。

突然だが、僕には、悩みがある。

בְּרִית מָנָה בְּרִית מָנָה בְּרִית מָנָה

「かわいいとかゆうなつー！」

そう、『かわいい』と言われることだ。学校で告白された回数は数知れず（ちなみに、男女比は7：3、男7割、女3割だ）、友達と待ち合わせしていたらナンパに会い、街を歩けば、結構な確率でスカウトされる。

「なんでこんなにかわいいの？」

（優奈は167cm、僕は154cm、ううつ低い、）、

頭を撫でようとしてくる。その手を避けながら、

「しるかつ！？」

と呟び、睨み上げる。

「そんな顔してもかわいいだけだよお～～？」
「うう～～

頃垂れた頬を、ぷにぷにされる。

「ねえ、明日ヒマ?」
「ん?ヒマだけど?」
「買い物行こつー。」
「家の工場の（じつけ）（ば）の手伝いが・・・」
「さつきヒマつて言ったー。家に迎えに行くわよ、あさーー時
「うう～～、分かったよう」

僕は、いつも優奈には逆らえない——（こや、ほとんどの人にもだが・
・・）

「じゃあ、私いくねつー！買い物して帰らないといけないから
「え？うん、バイバイ
「バイバイ～～イ

「約束だからね～～」と言いながら、走り去っていく。
明日、買い物かあ何買うんだろ？

(まあ、いつか、家に帰つたらアレを完成させよいつとー。)

橋が見えた、家はもうすぐだ。

僕の家は工場だ、お父さんが社長をやつている（と言つても、下請けの下請けのさらに下請けといづれとも小さな工場だ）その影響か、僕はメカ作り、モノ作り、が好きだ。僕の今持っているカバンも工具やその他諸々の道具で満載だ。

（口元をじりじりーーっと）

色々考えていたからだらうか、気づくのが遅かつた。
気づいた時には、車に撥ねられていた。手や足が有り得ないほ
うに曲がる。

吹つ飛び、手すりを越え、川に落ちて行く、

（ああ、コレ死ぬかも・・・）

そして、僕の意識は墮ちた。

第一話『めあせ、みべるるプロローグ』（後編）

初めてで、戦々恐々していますが、
じこまでお読みいただきありがとうございます。

第2話『ひとりあべす、状況確認』（前書き）

描くのって難しいですねーー！
才能がほしいのですーー！
2話ですーー！

第2話『とりあえず、状況確認』

(・・・うつ)

意識が浮上する。

(・・・僕は・・・死ん・・・だのか・・・?)

手を動かしてみる。

「・・・はうつ!—」

痛い・・・死んではない様だ。

(じや・・・、ここは病院か・・・)

目を開けてみる。光が視界を塗りつぶす。
暫くして目が慣れてくる。

(知らない天井か・・・)

(知らない・・・病院でない・・・?)

(こんな天井は見たことがない・・・)

(木目調の天井だ・・・いや・・・木の天井か・・・)

体のいたる所が痛いので。目だけで周りを見回す。
どうやら、僕はベッドに寝かされている様だ。
机と椅子がある。

(・・・つと、ずいぶん落ち着いてる様に見えるが・・・
頭の処理許容限界を、もうとっくに突破している。
まともに考えていないので・・・)
奥には・・・

人がいる、女性・・・女の子の様だ。
鍋の前に立っている、料理をしている様だ。
とりあえず、話しかけてみる。

「あの〜、すいません」

「%\$`*!-!」

ビクウウツツ！-

字で書くと、こんな反応をした。
そして、

バタバタ、ドタンッ！バタンッ！

つと物凄い勢いで家（部屋?）を出て行ってしまった。

暫くすると、玄関のドアをが開く音がした。

（・・・わざわざの子が戻つて来たのかな?）

音がした方を見る。

そこには、女の子ではなく、お爺さんがいた。

その後ろに、わざわざの女の子がいる。

お爺さんが口を開く。

「 #\$%& ?」

それは、聞いたことの無い言語だつた。

その言語は、それは英語のようであつ、日本語のようでもあつ、

フランス語のようであり、中国語のようであった。
聞いたことの無い言葉だったが、懐かしさを感じる・・・
そんな言語だった。

第2話『ひとりあそび、状況確認』（後書き）

話が進まない…
こんなものなのかな?

第3話『めよつたひ、話しかけてある』（前編）

3話です読んでいただきありがとうございました御座ります。

第3話『およつたり、話しかけてみる』

「 #\$%& ?」

もう一度、お爺さんが語りかけてくる。
だが、やはり分からぬ・・・いや、知らない言語だ。

(ゞしそう・・・あつ、自分寝たまだ!)
(こ)の人が助けてくれたのかもしれないし・・・)
(寝たままは、失礼だよね! !)

そつ思い、起きようと試みる。

「へへッ! !」

声にならない悲鳴がれる。

お爺さんと女の子が慌ててベッドに自分を戻そつとする。

僕はそのままベッドに寝かされる。

お爺さんは困ったような顔をする。

女の子はオロオロしている。

(・・・うへん・・・どうじょう?)

(どう考へても・・・日本語じゃないし・・・)

(でも・・・ありがとうございます)

(外國の人も分かるよね?)

そう結論づけ、僕はお礼を言つ事にした。

「あ、あの～助けていただきどうもありがとうございます」

僕の言葉を聞いたお爺さんの顔が、

一瞬で「困惑」から「驚愕」に変わった。

（え？僕、変なこと言つた？）

（もしかして、お爺さんの言語では、「ありがとうございます」が
禁句？）

（それとも、「どうも」が「死ね」とて意味とか？）

（あっ！「あの」がだめとか？・・・）

（うへ・・・放り出されるかも・・・）

（殺されるかも！？）

と、ネガティブスパイラルに陥っていると、

「君は、古代語が話せるのかね？」

「はつ、はこい・すこません！殺せなこでトセコ・すこません！」

「ほつほつほ、殺せんよ、安心せこ」

「すいまつ・・・あ」

(あれ? こま、日本語だった?)

お爺やさま! パ! パ! こる。

「むつ - 度聞」いつ、君は古代語が話せるのかね?」

(古代語つて何?)

第3話『およつたり、話しかけてみる』（後編）

お読みいただきありがとうございました。
小説を書くのは、初めてな者なので、
皆さんの「指南」、「指摘頂きたい」と思っています。
感想の所に書いていただけると幸いです。では

第4話『やうですか、異世界ですか』

「古代語……ですか？」

「やうじや」

「すこません、古代語つて何ですか？」

「こま君が話してこる言葉のことじゅよ」

「……日本語……ではなく？」

「ほつ……この言葉は「ホン」と書つかのか」

「やうです、日本という国で話されている言語です」

「……一ホンか……生憎そんな国はしらんの」「

「……やうですか……あつ……ちやんとお礼言つてしませんでした
ね、

どいつもあつ「いいんじゅよ、そんなことは、それに礼を言つ
相手が間違つているわい」

そつぱつて、後ろに立てる女の子に視線を向けるお爺さん。
僕も、女の子に田を向ける。（こままで、パニックになつていたの
で、

ちやんと見るのはこれが初めてだ。）

服装はゆつたりとしたチユーニック風のシャツみたいなのに、
膝ぐらいまでのパンツ。そこからスラリと伸びる手足、
くびれたお腹、大きくはないが形のいい胸、

大きな蒼い目、整った顔立ち、はつきり言ふ物凄い美少女だ。
一つ大きな特徴を上げよう。茶色い髪（もちろんコレではない）
に犬耳。（犬じやないかもしぬないが）

そう、犬耳があることだ。

(かわいいな) 犬耳だ(はじめてみた)

と、まあやつ、ぱーっとしばらく見ていたら。

「へ疎通へ・・・ほりこれで話せるじやん」

お爺さんがそいつに。

「え?でも、僕この言葉以外分かりませんよ?」
「大丈夫ですよ」
「え?なに?なんて?だれ?」
「だから、言葉が通じますよ」
「・・・へ?」
「こ・と・ば・通じますよ」
「・・・うん・・・・そなんだ・・・え?・・・なん?」
「今、ゼイスさんが疎通の魔法を掛けたでしょ?」「
魔法!?」
「そう」
「魔法つて?」
「魔法つて?」
「さつきゼイスさんが疎通つて古代語で言つてたでしょ?」

(・・・ゼイスさんって誰？・・・あ～お爺さんのことか・・・)
(・・・魔法・・・かあ・・・さつきから薄々思つてたけど・・・)
(・・・ファンタジーだよ・・・地球じゃないよ・・・)
(・・・コレ・・・家・・・帰れるのかな？)
(優奈との約束・・・守れないかも・・・)

そう思つうと、涙があふれてきた。

止めようとしても、どんどん溢れるばかり、

突然泣き出した僕に、慌てるゼイスさんと女の子。

「ど、どうしたんじやつー？」

「大丈夫ですかっ！？どこか痛いんですかっ！？」

ゼイスさん治療の魔法をつ！！

「ああ、分かつた・・・<治療>」

(いや、もう大丈夫だよ・・・)
(それよりも・・・僕は・・・)

その後、僕はしばらく泣き続けた。

「ひぐつ・・・ひぐつ・・・うう・・・

う・・・だ、大丈夫です・・・もう・・・いいですから・・・」

「本当に・・・大丈夫なの？体は痛まない？」

「まご……むへ、せんじんじ痛みません」

「そり・・・やつぱりゼイスさんの魔法は凄いわね」

「・・・はい」

「ところで……聞きたいことがあるんだけど……」

「なんですか？」

僕のことを見つめ、聞くか聞くまいか迷っているようにモジモジする女の子。犬耳が時折ピクピク動く。

卷之三

- あなた -

-
うん?
』

一
あなた

「なんですか？」

「・・・あなた・・・男なのつ！？女なのつ！？」

「男ですか！」

「嘘だ！」

「嘘じやつ！」

(おおう・・・ゼイスさんも入ってきた)

ひつじて、僕の異世界での生活が始まった。

第5話『あれ?なにこれ?』（前書き）

犬耳女の子視点です。

やつとヒロインの名前が出てきた。

なに?この・・・解説回・・・

第5話『あれ？なにこれ？』

私は、フェリシア、ファミリー・ネームは無いです。
気が付いたころから、ゼイスさんの所でお世話になっています。
私には、犬耳があります、ゼイスさんによると、
この耳は、犬狼族の特徴だそうで、私は普通の人よりも
嗅覚や聴覚が良いそうです。

ゼイスさんによると・・・この世界には、二つの大きな大陸があり、
西の大陸と東の大陸に分かれていて、東の大陸には、
人間種、獣人種、妖精種、がいて、
人間種は、この大陸の中で一番数が多く、人間族、小人族、巨人族
が、
主な種族について、肌や髪、瞳の色は、十人十色、ただ黒は居ないそ
うです。

獣人種は、大昔に魔獸と人間が交わって生まれた種族で、
魔獸というのは、魔物と違い、しつかりとした意思、
魔物とは比べ物にならない魔力を持つていて、とても知能が高く会
話もし、上位種になると、
聖獸と呼ばれ、世界最強と言われる竜種に匹敵するほどの、知識と
力を持つ者も居たそうです。

魔獸は400年程前の東西大陸の大戦争の時にほとんど死んでしま
い、
今は数えるほどしか居ないそうです。

獣人種は、初めは魔獸の血を色濃く継いでいて、見た目がほとんど
魔獸と変わらず、

魔獣の力も強かつたそうですが、今ではその血もほとんど薄れてしまい、

見た目としては、犬みたいな耳があつたり、ネコみたいな耳があつたりするだけで、

人間とほとんど変わらず、筋力や魔力も人間より少し多いだけにとどまるだけだそうです。

妖精種は、数が少なくて、小さくて力持ち、加治や細工、建築などが得意なドワーフ族、

美人が多く大きな魔力を持ち、その強大な魔力から魔法が得意で、精霊魔法なども使いこなすエルフ族、その他小さな精霊や妖精たちが居るそうです。

また、ドワーフ族やエルフ族は長命で、軽く人間の十倍生きたりするそうです。

獣人種も長生きなそうですが、人間よりちょっと長生きするかなあ？

ぐらいだそうです。

次に、西の大陸には、魔族がいて、人間種、獣人種、妖精種はほとんど居ないそうです。

魔族は、この世界の人口の約四割を占めていて、能力の平均値がどの種族よりも高く、

紫色の肌、黒に近い髪色、でも真っ黒は居ないそうです。

また、東の大陸と西の大陸は長い間戦争をしてきて、

戦争自体は100年前に終わつたものの、

人間種等と、魔族の間には、まだ深い禍根があるようです。

そして、最後に竜種は、西と東どちらにも住んでいて、

戦争の時には、どちらにもつていなくて、泥沼化した戦場の間に

入り、

戦闘を止めさせたりしていたそうです。
またその理由が「五月蠅いから」と、とんでもないことをする種族
だそうです。

あれ？ 私、誰に何を解説してるの？

私、おかしくなった？

・・・ 気のせいよ・・・ きっと気のせいやつ！

いつもと違う匂いがするかうひつ！

・・・ 気を取り直して、口諭の近くの川に洗濯に・・・
ではなく、料理やその他諸々に使つたための水汲みに・・・

・・・ あれ？ なんか変な匂いがする・・・
いや、へんつていうか、嗅いだことの無い匂い・・・ じゃない・・・
・・・ けど・・・ ちょっと嫌な感じがする・・・
・・・ 川の方？・・・ 何か・・・ あるの？
・・・ とりあえず・・・ 行つてみやつー！

いつも水汲みをしている場所についた。

・・・異常はない・・・ここにはだけど・・・
・・・匂いの元は・・・もっと上方か・・・

そしてしばらく上流に向かって歩いて、
それを見つけた。

それは、うつ伏せに倒れている。
黒ずくめの人型だった。

・・・黒い・・・黒い髪・・・魔族?
・・・匂いのもとは・・・これ?
・・・この匂い・・・血!?
どこが怪我してるの!?
こういうときは・・・
えと・・・まず・・・状態の確認!
・・・とりあえず仰向けにしなきや!—

・・・え?・・・人間?
・・・それに・・・女の子?

・・・それよりも
意識は・・・無いつ
呼吸は・・・弱いけどじつに
心臓は・・・動いてる、けどこれがじゃ血が流れず死んで死んじゃう…
骨も飛び出してる…!
とりあえず血を止めないと…!
あんまり使つたことないけど…
ダメもとで…!

「↙治療へ…」

・・・ああ…やつはダメだ…!
ほとんど効いてない…!
・・・こいつなら…家に連れて帰る…!
ゼイスクんななら治せるはず…!
森の賢者 と呼ばれる、ゼイスクunnari…!

第5話『あれ? なにこれ?』（後書き）

ゼイスさんは賢者でした。

主人公は、もうすでに最強ジョブの一つの、
賢者を仲間にしてました。

第6話『実は、前回は回想だつたりして』（前書き）

すいません、遅くなりました。
もひとつ早く上げれるように頑張ります。

第6話『実は、前回は回想だったらしい』

「あつがと/or/れこまかーーホントゼウ/ひよかと思つてたんですね
歓喜のあまり、ベッドから飛び起きたHリシアちゃんの手を握る。

「・・・それで、その後なんだかんだあって
今のおなとの会話にいたるわけよ」
「・・・そうですか・・・いや・・・われよりも・・・」
「・・・それよりもあなたの名前は?」
「Hの・・・あ、僕のなまえは、櫻井 葦と言います」
「サクライ・・・変わった名前ね」
「あ、カオルが名前です」
「じゃあ、カオルこれからよろしくねーー!」
「よろしくお願ひします・・・え?どうこう」とですか?」
「あなた・・・これから一緒に住むのよーー!」
「なー?ちよつ!え?Hで?」
「そうよ」
「・・・Hの家で?」
「ええ」
「一緒に?」
「ゼイルさんもね」
「よかつた・・・本当によかつたーー!」

「・・・え、ええ、いいのよ・・・本当にあなたかわいいわね・・・似合つてるわ」

(ん?かわいい?似合つてる?)
(・・・え・・・まさか・・・)

意識を下に向ける。

スースーする。

ゆっくりと田線を下に向ける。

服の裾がヒラヒラしている。

これは・・・どう見てもスカートだ。

「・・・キヤー――!あつ、イヤツ――見ないでつ――!」

体を抱くようじづくまる。

「・・・あなたのその反応・・・本当に女の子じゃないの?
・・・そこいら辺の女の子より、十倍・・・いや、

百六十一倍女の子っぽいわよ?」

「・・・なんですかその六十一倍は・・・う・・・僕、お嬢に行
けない・・・」

「大丈夫じゃよ」

「ゼイズさん・・・なぜですか・・・」「んな・・・スカート穿いた
男なんて・・・」「嫁になればいい

「ゼイスさん……僕は男です……」

「……なん……じゃとつ……？」

硬直するゼイスさん。

「……ダメじゃないカオル、ゼイスさんがショック死しちゃうじやない」

「……大丈夫ですよゼイスさん、カオルは女の子ですよー」

「……はっ……なんじや、驚かすんじやないわい」

「フヨリシアさん……なんてこと言つんですか……ゼイスさん、僕は男です……」

「……はう……嘘じや……わしは認めんぞ……！」

「認めてください……！」

「……カオル……」の際、認めちやになさこ……女だつて

「イヤですっ……」

その後、そんな遣り取りが十分ぐらい続いた。

「……分かつていただけましたか？」

「……分かつた、要するに……カオルは女の子なんじやな？」

「そうよ、ゼイスさん」

「フヨリシアさん……いい加減にしてください……僕はオ・ト・ロ・

ですっ……」

「……も、分かつたわよ……ゼイスさん、カオルは男よ」

「……そうじやつたのか……すまなかつた、カオル」

「分かつてくれたならいいんです……それよりも……」

「……じで暮らすとほどうこう」とです?」

「どりもなにも、そのままの意味じやよ」

「いこんですか?」

「いこんじやよ……まあ、とつあえず言葉を覚えるまで、
とこう条件はつくんじやがの」

「えと、く疎通>でしたつけ?その魔法じやダメなんですか?」

「そうじや、く疎通>の魔法は、術者とそれを

掛けられた者同士しか効かないのじやよ」

「……はあ、そつなんですか……じやあこれからよしへお願
いします」

「よろしへの」

「ひして僕の今後は色々決まっていくのだった。

第6話『実は、前回は回想だったりして』（後書き）

なんだこれ、ベッドの前で話してるだけ・・・
全然移動しない・・・異世界トリップなのに・・・

第7話『服を、僕のズボンを…』（前書き）

やつたーー！

ユニークアクセス総数1000突破しました。
これも、読んで下さる皆さんのおかげです。
これからもよろしくお願いします。

第7話『服を、僕のズボンを！』

「それはまあ、いいんですけど……服、どうにかなりませんか？」
「……それでいいんじゃないの？似合つてるし」
「フーリシアさん！ 酷いです！！ズボン、他にないんですか！？」
「あつ！？僕の制服！！僕のズボンは！？」
「あの真っ黒いの？」
「ん？・・・そう、ソレです」
「・・・アレのこと？」

フェリシアさんが指を指す方を見る。

「アレです！…あつ・・・・・エコビリだ・・・・・エコラムリだ・・・・・

「そりやあ、ねえ？ゼイスケン？」

「なんであるなこと！？」

「骨とか飛び出しておったじの？」

「グロツ！…なんで僕生きてるの？？」

「そりやあ、へ治療への魔法で、チヨイチヨイツヒの？・・・・・

「魔法凄つ！…！」

「え、いや、」Jの母でフローリシアさんが一番強いてみたいだ。

「へ、じゃあ、魔法での服ひにかならないんですね？」

「ん――出来ないわけではなこんじやが……」

「出来ないんですか？」

「出来る……だが……のうへ、フローリシア」

「ねえ？ゼイスさん」

「なぜですか？」

「そりゃあのう」

「「似合つてるから」、それにかわいこい、ここじやない」「よくあつません……」

「……む、仕方ないわね……ゼイスさん直してあげて」「……だからなぜフローリシアが仕切るんじや……」
ねし、年長者じやぞ？……フローリシアを育て上げたのじやぞ？
「ソレはソレ、コレはコレ……わあ、早くー。」
「……分かったわー……それ、復元へ」

すると、僕の制服（学ラン）が薄つすらとした光に包まれた。
なんかうへ、とひも・・・

「とても綺麗です」

「凄いでしょ？」

「はい・・・凄いですね、フローリシアさん・・・どんどん直つてく・・・」

「・・・わしがやつてるんじやが・・・」

「・・・」

暫くすると光が消え、僕の制服一（学ラン）は元通りになっていた。
僕は、急いで制服一（学ラン）に着替えることにした。
・・・ん？背中に違和感が・・・

「見ないでください！――」

「ちつ――」

「・・・残念じゃ――」

「何を期待してるんですか！？僕は男です！――」

絶対に見ないでください！――」

そりて念を押し、僕はよつやく着替えることができた。

第7話『服を、僕のズボンを！』（後書き）

早く外に出たい・・・でも、出れない・・・うう・・・
冒険の無いファンタジーなんて・・・

第8話『…………とこひじがあったんだ』

「……ふう

今、僕は制服——（モラン）に着替え、フエリシアさんの淹れてくれたお茶——（ドクダミ茶の様なもの）を飲んで落ち着いている。

「……おいしいです」
「でしょ？森で取つて來た薬草をお茶にしたのよ」
「そうですか……じゃあ、ゆっくり味わつて飲むことになります」
「え？なんで？」
「だつて大変でしょう、薬草を採つたり、蒸したり、干したり、煎じたり、色々と……」
「……」

フエリシアさんが黙つてしまつた。

（変な」と言つたかな？……怒つちやた？）

「……あなた……」

「はい？」

「……あなた何者なの？！古代語しか話せないし、お茶の作り方は知ってるし……」

（・・・むう、どうしよう・・・言つた方がいいかな？）
(助けてくれたんだし・・・言つても大丈夫だよね？)

「・・・えと・・・僕は・・・」

僕は、自分の身に起つたことを話した。

「・・・そういうわけで今、あなた達に助けられてここにいる訳です。」

「・・・信じられないわね」

「・・・ですよね・・・」

「そうかそうか、そうじやつたのか」

「ゼイズさん？何か心当たりでもあるの？」

「カオル・・・おぬしは、二ホンという国から来た、
とそう言つておったな？」

「はい」

「サトー・イチロウ……佐藤一郎?」

(サトー・イチロウ……佐藤一郎?)

「日本人?」

「そうじや、奴もそう言っておつたわい」

「え? ! ジやあ、僕みたいに、なんか、世界を
渡つた、みたいな人がいるんですか?」

「ああ、そうじや」

「その人、佐藤さんはどに? 何をしてるんですか? 生きてるんですけど? !」

「まあ、まてそう慌てるな」

「すいません……で、その人はどんな人なんですか?」

「勇者じや、それに王じや」

「は?」

「いや、『だつた』、と言つた方がいいのかのつ

「『だつた』? 過去形ですか?」

「奴は死んだよ」

「死んだ?」

「40年ほど前に奥さん、王妃が死んでのう、悲しみに暮れての自殺じや」

「……そうですか……あれ?」

「そういえば、僕、起きた時、<疎通>の魔法を掛けられた時日本語ではなく?とか聞いていたような気がするんですが?」

「ああ、その時はすっかり忘れておつたわい」

「わ……忘れてたって……それと、奴と言うのは

佐藤さんのことですか？友達だつたりしたんですか？」

「ああ、一緒に旅をしたものよ」

「ゼイスさん・・・あなた何歳ですか？」

「もうすぐ15歳になるの」

「なんですか？」

ゼイスさんと僕の話を黙つて聞いていたフヨリシアさんが突然声を上げた。

「ゼイスさん！そんな話聞いてないわよ！」

「聞かれなかつたから」

「158つていうのは、ずっとお爺さんだつたから納得できるけど、勇者の旅のお供つていうのはいらっしゃなんでも無いわよ！」

「なんでじゃ？」

「あんな厳しい旅・・・ゼイスさんが乗り切つたなんて・・・」

「そんなんに厳しかつたんですか？」

「厳しいも何も有り得ないわよあんなのあんなの乗り切れたらそれこそ化け物よ」

「本人がここにいるというのに化け物と言われたわい」

「ああつ、『めんなさい』ゼイスさん、あまりにも驚いてつい・・・」

「

シュンとなるフヨリシアさん、犬耳も垂れ下がる。

(・・・フリシアさん、トランプとか弱いつ・・・)

ゼイスさんとフリシアさんの割と真剣な会話を聞いて、
そんなことを思つてゐる僕だった。

第8話『・・・ところがあったんですね』（後書き）

8話も外に出ない異世界トリップものは、そうないと 思います。
次回こそ外に出します。

第9話『やあ、1J飯です』（前書き）

「うつ、外に出れなかつた。

次回絶対外に出来ます。

今日はいつもよりちょっと長いかも・・・

第九話『ある、1J飯です』

あの後、フローリシアをさとゼイスをはなからこいつ話しあつて
いた。

割と僕のことは、ほつたらかしに・・・

(暗くなってきたなーー)

(あ、「1J飯どうするんだろ?」)

(どんな、「1J飯だろ?」)

と、この世界の食卓事情に思いを馳せっこると、
どうやら話が終わつたようだ。

「あー、ほんとに暗くなつてるーー。」

「わうじゅのつ・・・夕飯にするかの?」

「じゃあ、準備するわね

(・・・手伝つた方がいいかな?)
(1Jに住む条件は、とりあえず言葉を覚えるまでだから・・・)
(やのつか、出でこかないといけないし・・・)
(えりにかして帰るにしても・・・)

(それまでは、この世界に住む訳だし……)

(うん！手伝おつー)

とこつわけで手伝つことにした。

「すいません、あの……何か、手伝つことはありますか？」

「ん？じゃあ……コレ切つて

「コレは？」

渡されたのは、表面は赤い葉っぱが覆つていて、

それを剥ぐと中の淡い緑色の葉っぱが

キヤベツみたいに何重にも重なつたものだつた。

大きさは、僕の拳と同じくらいか、少し大きいくらい。

(……キヤベツ？……でも葉っぱが赤くて、この大きさ……)

(……トマトみたい……でもトマトじゃないから……)

(……トマジ？……トヤベツ？……キヤマト？)

「トベツよ」
「はは・・・」

予想どおり過ぎて、思わず苦笑いが出てしまつた。
気を取り直して、トベツを切ることにする。
不安に思つていたが、包丁はあるみたいだ。

サクッとトベツに包丁を入れる。

(ナイフとかだったらどうしようかと思つてたけど・・・)

(包丁あつてよかつた・・・切れ味良すぎるのが気になるけど・・・)

(音がザクッじゃなくてサクッだもん・・・)

(切れないよりはいいから、まあいいか)

(あ、切つてとは言われたけど・・・)

(どう切つたらいいんだろう?)

「フューリシアさんトベツはどう切つたらいいんですか?」

「適当でいいわよ」

「分かりました」

サクサクトントン・・・・とトベツを切つてゆく。
千切りにするつもりだ。

スープを温めているフューリシアさんが話しかけてくる。

「あなた、料理もできるのね」

「家でやつてましたからね」

「家でやつてたつて・・・あなたホントに、女じゃないの?」

「女じゃないですよ・・・んー・・・この世界・・・

えーと、この国?・・・では、男が台所に立つ・・・厨房?・・・

食事を作るのつて珍しいんですか?」

「ええ、一人暮らしや、旅人、冒険者、みたいなのは作つたりするけど

家族と一緒に暮らしていふ男は、ほとんど作らないわね、

家の家事は女、外の仕事は男がするって大体決まってるのよ
「なんですか・・・男が偉くて、女は偉くないみたいなのがあるんですか?」

「無いわよ・・・表面上はね」

「表面上?」

「100年前勇者王サトーが差別を無くすと言つて、貴族の廃止や奴隸の解放その他色々な事をしたのよ、その中に男女差別もあつたってわけ、でも、昔からの流れを変えるのは難しかつたみたいね」「そうなんですか・・・」

佐藤さんは、どうやら本当に勇者だったみたいだ。

さつきゼイスさんに聞きましたけれど、

佐藤さんについて、聞かなくてはいけないことがある。

そういうしてのうちに夕飯の準備は終わった。
夕飯は、簡単でパン、スープ、トベツの千切りやほかの野菜も一緒に
になつたサラダだ。

「では、食べるとするかの?」

「そうね」

「いただきまーす」

「ん? なに? カオル」

「なつて?」

「今によ、「いただきます」ってやつ」「えと、「いただきます」っていうのは、食前の挨拶みたいなもので、

食事を作ってくれた人、それと食材に対する感謝の言葉・・・つていうことなんだけど、まあ最近は、言わなかつたりする人が多いですね」

「ふうん、いい言葉ね、それじゃ私も、いただきます」「ほほほほほ、思い出すの〜、奴もいつもそういうやつて律儀に説明しておつたわい」

とかなんとか雑談しながら「飯を食べる。

(お箸が無い・・・あるのは、ナイフとフォーク・・・お箸今度作る(?)

そう心に決める僕だつた。

「ご飯を食べ終わり、食後のお茶ー（今度は緑茶みたいなの）を飲んでいる。」

佐藤さんについて聞きたかったことについて聞く。

「ゼイオスさん」

「なんじゅ？」

「サトーさんはどうやってこの世界に来たんですか？」

「召喚じゅよ」

「召喚？」

「やつじや、勇者召喚、105年前まだ、東の大陸と西の大陸が戦争をしておった時に西の大陸の長である魔王を倒すために、勇者召喚と言われる魔法によってよばれたのがサトーじゅ。

まあ、サトーは魔王を倒さずに戦争を終わらしてしまったがの」

「やつだったんですね・・・では、魔法で元の世界・・・

僕の世界に帰る」とはできませんか？」

「それはわからんの」

「サトーも何度も帰りうとして、色々な魔法を試しておったが、こちらで守るべきものが沢山できて、そのままひきこもつてしまってしなくなつたんじや」

「やつですか・・・」

(本当に帰れないかもしれないなあ)

「氣を落とすな、まだ帰れないと決まつたわけではないわい

「え?...どうこいつ」とですか?」

「まず、魔法は無限にあるところ」と、

次に、サトーはどうも帰り方を見つけたよつたよつじやつたところ

「ことじや

「本當ですか?」

「ああ、サトーの研究資料があるんじやが、それに書いているかもしれんしの」

「その資料はどこ?」

「王都にある国立図書館じゃ」

「王都にひびきいたら行けますか?」

「まあ、やう憶てゐな、ちゃんと王都に行かしてやるわい、
それに、ビリに行くにしてもまず、ここの言葉を覚えるのが先じゃ
「はー・ひびきましたね···」

(く疎通^の魔法は、術者とそれを掛けられたものしか効果がない。
・か)

「さひ···もひ寝るとするのかの?」

「ひび」

「そうですね···疲れました···あ、僕はビリで寝ればいいで
すか?」

「あなたが寝てたベッドでいいわよ、アレもともとお客用だつたか
ら」

「なにから今まで、ありがとうござります」

「いいんじゅよ、さあ明かりをけすぞ」

ふつ、と明かりが消える暗くなる室内。

(···なんか、色々あつて疲れた···色々ありすぎた···)
(···そいつえば···僕、なんでスカートだったんだろ?)
(···明日聞いてみよう)

ついで僕の異世界生活一寸田は終わった。

第一〇話『うへん、空氣がねこじー』（前書き）

すこません、遅くなりました。
テスト……イヤです……

第10話『つ～ん、空気がねいしこ』

頭の上から声がする。

「・・・な・・・さ・・・」

卷之三

「レバテス・レバテス・レバテス・ルハ?」

「起きなさいっ！」

「アカデミー賞」の歴史

「1か月?」

- 増えた！？

… 二月 … ん … 「 談題ですよ … 起きました 」

田を開けるとフヨリシアさんの顔があつた。

「どうしたの？」

「ダメです！それはダメです！」

「なんで？大丈夫よ」

「大丈夫なんですか？何をするつもりだつたんです？」

「キス」

「鱈」（注：キス科の硬骨魚の総称。白鱈（シロギス）の身は淡泊で美味）？魚ですか？」

「さかな？ちがうわよ、キスよ」

「やつぱりダメです！…どうしてしようとするとんですか！？」

「かわいいから？」

「ダメです！…それに…」

「それに？」

「それに…まだ…とした」と…ないのに…」

言つていて顔が赤くなるのが分かる。

（キスなんて…キス…）

恥ずかしすぎて、顔を逸らす。

「あー…もうつ…かわいすきつ…わ…つ…」

フヨリシアさんが思いつき抱きついてくる。

「いやっ！止めてください…！ダメです…！色々ダメです…！胸とか…イヤッ、とにかく離してください…！」

胸とか・・・イヤハ、とにかく離してやだねー。」

「おまえ、おまえが何をやるか知らねえよ。」

「それはそれでダメです！！それに僕は男です！」

「ほつほつほつ、よほどカオルのことが氣に入つた

「ほんとうに、よほどガラルのことが僕は入ったよ。じゃの?」

「ゼイズさん！笑つてないでどうにかしてくだせこーー！」

「アラビア語の文法」

「これフヨリシアよ、離してあげなさい、カオルが困つておるわい」

「さあ――・・・・ふう、もう、分かつたわよ」

「ふう、助かつた……んと、おせむりじゃこます」

卷之三

卷之三

「ちょっと、抱き足りないけど、

そして、2日目の朝は始まつた。

「よし、それじゃあ水を汲みに行つてもうおつかの」「はーい、行くわよカオル」

「たゞ、たゞ」

- 10 -

と、いうわけで只今絶賛森の中だ。

両手に桶をもつて、森の小道を歩いている。

「ん～・・・空気がおいし・・・」

「空気が？味なんかないでしょ」

「味つていうか、空気が、呼吸をするのが気持ちいいんです

「ふうん、そうかしら？」

（あ、昨日起きた時なんでスカートだったか聞かないと・・・）

「そういえば、僕が昨日起きた時、なんでスカートを縫かされていたんですか？」

「スカートの方が似合つたからよ」

「・・・そうですか」

「そうよ」

聞くまでもなかつた。

さて、きれいな小川の前に着いた。

「きれいですね・・・」

「でしょ？ここの中はそのまま飲んでも大丈夫なのよ」

(ちょっと飲んでみよ~)

「つめたつ……でも、おこし……っ！…」

「そんなに言ひほどの？」

かの世界に
かかわるかしらん方食ひ

「そ、う・・・よ、かつたわね・・・」

(うわ、フヨリシアさんとの温度差が痛い……)
(ちょっと……落ち着こい……)

「五」

「落ち着いた？」

はい……すいません……興奮しそうでした

カオレが倒され、アーリアは彼女の死を嘆く。

「そ、うなんですか～、こんなところから僕をあの家まで運んだんで
すか、

大変だつたでしょう?」

「そんなことないわ、私みたいな獣人族は人より力があるんだから」

可憐に見かけによらない」でねがですわ」

おながは言ふ
かれいしなぐて
ながくそんなど

われたくないわよ」

「え～？かわいいのに～、素直じゃないな～」

「そつ、そんなことよりつ、力オルが倒れてたところ見に行つてみる？」

「うへん、どうしちゃう？…あつ！そりゃえれば、僕の鞄がない！」

！」

「じゃあ、そこに落ちてるかもしれないわね、行ってみましょう！」

はい、ただいま現場に来ております。

事故の被害者は17歳男性、猛スピードで走ってきた乗用車に撥ねられたものの、

異世界にトリップし、そこで魔法による治療を受け一命を取り留めた模様。

今は、怪我は完治し発見現場を、見物しております。

(・・・とかなんとか、キャスター風に実況してみたり・・・)

「どうしたの？黙りこくつて」

「へ？いや、凄い血の量だな～と」

「そりや、いろいろ飛び出すよつた、怪我だったんだから服なんか、破れるわ、突き抜けるわ、地濡れになるわで、

そりや、着替えさせるわよ」

「納得しました・・・でもなんでスカート?
フェリシアさんズボン穿いてるのに?」

「似合うから」

「そうですか」

「そうよ」

どうやら譲る気はないらしい。

(つと、鞄、鞄・・・)

(ん?・・・なんか、光るもののが・・・)

「ん~?あつ、あつた、見つかりました」

「見つかった?」

「コレです」

そう言つて見せたのは、黒い光沢があり、肩から掛ける紐のある、
いわゆる、エナメルのスポーツバッグだった。

「見たことの無い素材ね・・・コレは布?」
「ちょっと違いますが、似たような物です」
「で?何が入ってるの?」
「スパン・・・道具とか本とか・・・色々です」
「道具?」
「物を作つたり、直したりする道具です」

「本は？」

「学校の教科書です」

「学校・・・あなた・・・学生だったの？」

「え？・・・これも学校の制服ですが？」

「・・・そういえば制服って言つてたわね・・・

あなた、何歳なの？」

「何歳だと思います？」

「え～と・・・12歳？」

こちらの世界でも日本人は若く見られるようだ。

「違います」

「う～ん・・・13歳？」

「もつと上です」

「15歳！」

「もう少し！？」

「17・・・なわけ「正解です」って、

嘘つ！？私と同じ年！？」

「フェリシアさんも17歳なんですね」

「嘘よ・・・有り得ないわ・・・こんな小っちやいのが
私と同じ年なんて・・・せかいの ほうそくが みだれでいるわ

フェリシアさんが、凄く混乱してしまった。
どうじょつ・・・ちよつと落ち着くまで待とうか・・・。

暫く待っていたら、フエリシアさんの混乱は治まつたようだ。

「分かったわ……あなたは、12歳なのね？」
「17です」
「……どうやら聞き間違こじやなこよつね」
「聞き間違いじゃないです」
「そう、じゃあ、あなたはカオル・サクライ、人間、17歳学生、性別は女」違います」・・・男、と
「そうなりますね」
「ふ～ん・・・じゃあ、敬語は無しね……さんも無し……」
「分かりました」
「違う！」
「分かり・・・つたよ・・・これでいい?」
「もう一回」
「何回やんのー?」
「それでよし・・・ん、じゃあ改めて、私の自己紹介も……」
私はフエリシア、犬狼族、17歳女、あなたと同じ学生よ、これからよろしくね?」

そう言ひて手を差し出していくフエリシアさん……フエリシア。

(ん?・・・あ、握手か・・・)うちもあるんだ)

フェリシアさんの手を握り、

「つさ、 よりじくーー。」

笑顔で言った。

第1-1話『ヤイスの魔法講座』（漫書セ）

すこせん、今回はなんか中途半端になつてしまつた。

第1-1話『ゼイスケの魔法講座』

「よしーじゃあ、早く水汲んで帰りましょ

「うん」

持ってきた桶2つに、水を汲む。

結構ギリギリまで水を汲んだ、運んでるときちょっとひびれそうだ。

(ちょっと重いけど、アレぐらこの距離だったら大丈夫……かな
?)

「ん・・・しょっと」

「行ける?・・・あなた以外と力持ちなのね」

「これでも男の子だからね」

「う、じゃあ行きましょ」

そう言ってスタスタ歩き始めるフェリシア。

「って速っーーなんていぱわーーそんな早く歩けるのーー?」

「へ？・・・＜固定＞の魔法を掛けてるから・・・

つて、そうだった力オル魔法使えないんだった」

「魔法！？それも魔法なの！？」

「そうよく固定＞、物を固定する魔法ね」

「う～ん・・・魔法・・・魔法かあ・・・」

「どうしたの？」

「え～とね、魔法って誰でも使えるのかな～って

「向き不向きがあるけど誰でも使えるわよ

「僕にも使えるかな？」

「え？使えるんじゃないかな？」

「だつて、僕別の世界から来たんだよ？それに、魔法なんかなかつたし・・・」

「・・・それもそうね、帰つたらゼイスさんで聞いてみたら？」

「そうする、早く帰ろ！！」

「そうね、ちよつと待つて・・・＜固定＞これでこぼれないわ

「本当！？」

恐る恐る桶を逆さまにする。
こぼれない。

「・・・おお！凄い、凄い！..」

ブンブン桶を振り回す。

全然こぼれない。

「そこまで喜ばれると照れるわね

「そこまで喜ばれると照れるわね

「だつて凄いもん！！」

「魔法、使いたいんでしょ？じゃあ早く帰りましょ？」

「うん！」

「つて速つ！！カオル、家の場所分かるの！？」

「・・・分かんない」

「カオルつて子供みたって言われたことない？」

「・・・たまに言われる」

僕自身それで困っている。本氣で。

（もつちよつと身長が高かつたらよかつたのに・・・）

いつも僕の周りには、身長の高い人が集まる。——（カオル以外皆、平均か平均より少し高いぐらいの身長なのだが、カオルが飛びぬけて低いため、カオルから見たらそう見える）

（皆も、僕のこといつも弟か妹扱い——（周りから見れば兄弟もしくは、兄妹そのもの）
してばっかりだったし・・・）

そんなこんなで、家に着いた。

ところことで・・・

「ゼイオスさん！...僕に魔法を教えてください...」

「ほほほほほ、初めからそのつまつじやな」

「初めから？」

「」の世界の常識ぐらいい教えよひと黙つておひたから「

「常識？」

「いつも常識じや、言葉はもひひと、お金や、歴史、後は魔法とか色々

々じじや

「いつもだつたんですか・・・何かい向までもあつがとひいじやれこめや」

(常識か・・・確かに常識は必要だよね・・・)

(向いうじだぬ普通に思ひしても、いつちぢむおかしこなことじが
あるかも・・・)

ゼイオスさんは頭が上がりきらない。

「よし、じゃあ魔法について簡単に教えよつかの？」
「お願ひします」

ゼイスさんによる魔法講座が始まった。

「魔法には、大きく2つ「詠唱魔法」と「魔法陣魔法」がある。
「詠唱魔法」は、想像と魔力を練り、ソレを古代語に乗せて、
「詠唱」し、発動する」
「はい先生、質問です」
「なんじゃね？カオル」
「古代語って日本語のことですよね？じゃあ僕は簡単にできたりします？」
「それは分からんの！」
「なんですか？」
「カオルは古代語の「詠唱」 자체は問題ないとは思つたじやが・・・
魔力があるか分からんしの！」
「魔力・・・ですか・・・」
「心配するなカオル、そのための「魔法陣魔法」じゃ、
この世界には魔力が満ち溢れておる。それこそ空気のようじ、
どこにでも、なんにでもある、ソレを「魔法陣」を使い、
発動するものじや」
「・・・「魔法陣」とはどんなものですか？」
「ちよつと待つておれ」

そう言って、ゼイスさんが持ってきたのは一冊の本。

ソレを開いてゼイスさんが言つ。

「これが、〈魔法陣〉じゃ」

見ると本には、よくファンタジーのアニメとかで見るような、
〈魔法陣〉が描かれていた、ただそこには・・・

「・・・日本語」
「そうじゃ、古代語によつて、どのよつな、どれほどの魔法を使う
かが
書かれてある。」

「炎、魔力値二十、発現、と書かれているのは分かりますが間の記
号? コレは何ですか?」

「ああ、ソレはこちらの文字じゃ
「そうですか・・・じゃあ、魔法を使うには、やはりこちらの文字
を学ばないといけないんですか・・・」

「大丈夫じゃ、〈魔法陣〉を書くのは古代語の方がいいしのう
「でも、この〈陣〉は覚えないといけないですね」

「そうじやな」

「それと魔力値二十というのは?」

「そうじやな、魔力値の説明もしなければな・・・

魔力値、まあ人が持つてゐる魔力に値を付けたものじゃ、
人間種の平均は三十ぐらい、獣人種の五十ぐらい、妖精種は百ぐ
らい、

魔種は百五十ぐらい、魔獸は一百以上、以上といつのは、種によ
つて差がありすぎるからじゃ、

竜種は分からん、というか、測りきれん」

「どうやって測っているんですか？」

「ここには無いが、測定器がある」

「便利ですね」

「たくさん話して疲れたわい、ちょっと休憩にするかの」

まだまだ、ゼイスさんの魔法講座は続く。

「ちょっと、外に出るかの」

一休みの後、僕たちは外に出ている。

る原っぱに来ている。

そして、
奇麗な青い空が見える。

「すごい！！広っ！！見渡す限り緑！！」

「でも……」

そういうのながら振り返る。

「「」んな綺麗な景色みた」とないもん…」

「・・・」

黙つこぐる、ゼイスをとフリシア。

「どうしたんですか?」

「絵になるの?」

「ええ、ゼイスさん、でも服がねえ」

「田のワンピースとかどうじや?」

「ソレいいわねゼイスさん!カオル!着替えて戻るわよ!」

「戻りません!…」

「まさか…ここで着替えるの?でも…」

「フリシアよ、ワンピースなら…あるわ」

「ナイス!…ゼイスさん!…」

「用意されてる!…」

「さあ、カオル」

「着替えません!…」

「あ、ちゃんと見なによつにするから…」

「心配するなカオル、ちゃんと着替え用の衝立とか持つて来とるわ

い」

「用意周到!…って、そつこう」とじやな…」

「じゃあどういうことなのよカオル!…」

「どうもなにもワンピースなんか着ないって」と…」

「なんで!…ワンピースじゃなかつたらいいの?」

「それも違う!…まず、僕、男だからね!…」

その後、十分程度僕の説明や説得が続いた。

「また、そんな小さいことを……はあ」「呆れられた！？」

「それで？なんで、外に出たんですか？」
「なに、家にずっと籠つて話してもつまらんじゃろうと、外に出て、魔法の実践も含めて説明しようと思つてのう」「おお！じゃあ、火がボ――ツ――ツ――とか、光が、ピカ――ツ――とか、瞬間移動とかが実際に見れるんですか？」
「そうじや、ただ瞬間移動は無理じや」
「何ですか？」
「めんどくさいからじや」
「そんな理由で！？」
「〈詠唱魔法〉だつたら、ものすごい魔力を使うし、〈魔法陣魔法〉でも書くのがとても面倒なんじや」「そうですか・・・」
「まあ、今度教えてやるわい」「やつた！！」

「じゃあまあ見てみなさい……く灯火」

ゼイスさんが唱えると、小さな炎がゼイスさんの手の上に現れた。

「おお……」

「これが、〈詠唱魔法〉の基本じや、
ちょっとやってみなさい」

「はい……えーと?起こすことを想像して……
魔力と一緒に……ってゼイスわん……」

「なんじや?」

「魔力ってなに?」

「おお……そうじやつた、この世界の者は、
小さいころから魔法や魔力に慣れ親しんであるが……
カオルはそんなことが無かつたんじやのう……
どれ、手を出してみなさい」

言われた通りに手を出す、ゼイスさんがその手を握り、

「今から、魔力を流すから」

「はい」

暫くすると、手からピリピリとしたものが流れてきた。
ソレが、体の真ん中の方に流れしていく。

(ピリピリして・・・ちょっと痛い・・・)
(・・・でも・・・温かい・・・)

「これが・・・魔力・・・?」

「分かつたかの?」

「はい・・・たぶん」

「では・・・ソレを意識してもう一度してみなさい」

「はい!..」

もう一度挑戦する。

(イメージするのはライターの炎・・・)

(ソレを・・・魔力と一緒に・・・)

「<灯火>」

すると、小さな炎が手の上に現れる。

「出来た・・・おお・・・」

(なんだらう・・・本当に・・・)

(・・・異世界に来ちゃったのか・・・)

ちょっと、感傷的になつていると、
フェリシアがちょっと興奮しながら

「すゞいぢやない!! カオル!! 一田で魔法を使えるよつになるな
んて!!」

と言つてきた。

「え? なんで? この世界の人は、魔法とか魔力に慣れ親しんでるん
じゃないの?」

「慣れ親しんでも、すぐに使えるようになるんじやないの、
よく考えてみて? <詠唱魔法>の使い方を?」

「えーと・・・起こすことを想像して魔力と一緒に、
日本語・・・いや、古代語を・・・あ!!」

「そういうことよ、あなたが普通に考え、理解し、使つてい、
古代語・・・一ホンゴ? をここの人は知らないの、
カオルが、ここの中葉を知らないのと同じでね」
「・・・じゃあ、もし・・・僕がうつかり日本語で話したりしたら・
・」

「即、捕まる」

「もし捕まつたら?」

「監禁される、研究される、愛でられる、のどれかね」

「めつ、愛でられるつー……この国の法はソレらを認めてるの？」

「法は認めていいけど、抜け道なんていぐらでもあるし、もしかしたら、国に捕まるかもしねないし」

（監禁、研究つて宇宙人みたいなことされるのかな……）
（それに……愛でられるつて……）

「ううへへへ……どうしちよつ……そんなの……イヤだ……」

暫く、僕の未来に起つたつるかもしない事態について悩んでいた
51

「……ふふつ、「冗談よ」

「……本当に?」

「本当よ」

「はあへへへよかつたへへへ解剖されたらどうじよつかと思つたよ」「解剖されたら死んでるんじゃないの?」

「そうかもね……でも魔法があるなら……」

「……まあ、出来ないこともないわね」

「でしょ?」

「まあ、そういうのもないから安心しない、

でも、今のは冗談でもの凄く大げさに言つたけど、

カオルが二ホンゴで話すことはとても重大なことだという」と

「うん、分かった、だつたらちゃんと勉強しないとね、

「うつかり、ここの人気が知らない言葉でも使つたら、面倒なことになるだらうしね」

「いいでの生活は、なかなか大変そうだ。

「よし、次は＜魔法陣魔法＞じゃ」

そう言って、ゼイスさんがどこからともなく取り出した大きな紙。そこには、＜魔法陣＞が書かれていた。

「＜魔法陣魔法＞は、至る所に満ちている魔力を＜魔法陣＞を使って行う魔法じや、使う魔力が自分の魔力ではないため、

大規模な魔法を行うときや、魔力の少ないものが使うことが多い」

「じゃあ、誰でも使えるんですか？」

「そういう訳でもないんじや、＜魔法陣魔法＞も＜魔法陣＞を書くときには、

古代語を使うために、必然的に古代語がある程度解る者でなければならんのじや」

「むむ・・・でも、ここには、こちらの言葉も書かれていますよ？」

「だつたら、このこけらの言葉で全部書いたらダメなんですか？」

「そうじやな・・・どう言つたらいいんじやろうか・・・」

古代語は、魔力を乗せるものと言つたところじやろうつ？

「乗せる？＜詠唱魔法＞の時もそう言つてましたよね？」

「そうじやな、魔力を人として考へると、

言葉は、船みたいなもんじや、

「ひらの言葉はその船が小さくて脆い、だから人を乗せられない、古代語は、大きくて強い、だから多くの人を乗せられる、・・・と、そういうことじや」

「ひらの言葉には、力が籠めにくく、日本語には、力が籠めやすい・・・

つて、訳ですか？」

「そうじやな」

「だから、詠唱魔法も、魔法陣魔法も古代語が必要・・・と、そういう訳じや、本来、魔法陣を書くのは、古代語だけで書いた方がいいんじやが、

古代語だけで書くというのが、今ではほとんど出来なくなつておる、

そのために、混ぜじやの言葉で書かれておるが、そのせいで、本来出せる力よりも小さな力しか出せないんじや、

じやから、魔法陣魔法は余り使うものがいないんじや、魔法陣を一から書くのも面倒じやしのつ」

「その、魔法陣は何回でも使えるんじやないんですか？」

「一回きつじや、魔法陣は使用時に魔力で焼き消えてしまつたじや、

じやから、魔法陣を主体として使うものだ、

いつもあらかじめ書いたものを持ち歩いてある

「それは、面倒ですね、かさばるし・・・じやあ、

魔法で、魔法陣を書いたらいいこんじやないんですか？」

「はて？」

「いや、だからですね・・・詠唱魔法で、魔法陣を書いたらいいじやないですか」

「うむ? どうじや? ？」

「へへん、説明するのほうがよつと・・・

ただの思いつきだし・・・

「ちょっと、やってみなさい」

「ええ…うへん…やつてみます、魔法陣>はこれでいいですか?」

「やうじやな」

「では…」

田の前にある魔法陣>に意識を集中する。

(「魔法陣>…いつなつてるんだ…」)

一重円の真ん中>、五芒星、外側に起るしが書かれている。

(読めるのは…“水”、“出現”)

(他は…・・・読めない・・・そのまま「ペー」しよう…)

(…よし、覚えた)

(この魔法陣が、手の上に…)

「↙展開↙」

すると、僕の手の上に小さな魔法陣>が現れた。

(あ、でた・・・)
(けど、使い方わからんない・・・)

卷之三

•
•
•

返事がない、ただのしかばねのよつだ。

「ゼイスさん？」

かかかかかかかか

九

「フエリソラ」
アーティスト・アーカイブ

二

「ちらもしかばねだ。

!

おもう!? セイスさん!? その年で革命はちよこと無理じゅ

וְאַתָּה תִּשְׁעַרְתָּ בְּבֵית־יְהוָה וְאַתָּה תִּשְׁעַרְתָּ בְּבֵית־יְהוָה

「ちゅうと、若返つてゐるー?」

いきなりどうしたというのだ。

ゼイスさんの興奮度合いが、いきなりマックスになってしまった。

「・・・フエリシア、助けて!」

「イヤ」

「なんで!?」

「自分でまいた種は、自分で刈り取りなさい」

「いやいやいやいや、刈り取る以前にもう燃え上つてゐよーー!

無理だよーー火傷しちゃうよーー!」

「・・・しようがないわねえ、可愛い妹の頼みは断れないわ・・・

〈水弾〉

「起こすーーやつひやるどおおおおおおおおおウエアブーー?」

「ちよっとフエリシアさんーー今せらつと妹つて言つた!?」

叫んでいるゼイスさんの顔めがけて大きな水の塊が飛んで行つて、きれいに当たつた、あ、流された。戻ってきた。

「何をするんじゃフエリシアーー!」

「ちよっと、落ち着いてください、カオルが怖がっていますく水弾

」

「うおーー落ち着いた、落ち着いたからやめるのじゃ

「落ち着きましたか? 〈水弾〉

「おひょーー語尾のように〈詠唱〉を行つたフエリシアーー!」

「くみ」

「分かつた、わしが悪かつた、すまんカオル取り乱してしまった、どうじゃこれでいいだろ？」

「どうする？ カオルくみ」

「いいから！ そんなに水びだしにしないで！ ？ 風邪ひいちやうよ！」

「よかつたわね、ゼイスさん」

「ふ〜〜死ぬかと思つたわい」

「ゼイスさん、大人げないです、いくら今のが凄くつても、叫んだりするのは、大人げないです」

「『大人げない』と一回も言われた・・・」

「・・・ゼイスさん、そんなに落ち込まないでください、確かに大人げなかつたんですけど・・・」

「・・・もうダメじや・・・カオルにも言わた・・・」

ゼイスさんの心が折れてしまった。

ゼイスさんが復活するまで、暫く待つことになつた。

第1-4話『食卓事情』

「それで？」
「それでとはなんじや？」
「なんで、あんなに興奮してたんですか？」

回復したゼイスさんになぜあんなに興奮していたのかを尋ねる。

「それはほの・・・今まで面倒じやつた＜魔法陣魔法＞をカオルが
樂にしたからじや」
「はあ・・・?」

魔法について、よく分かっていないこのままにパンとこない。

「言ひたじやねりへ、＜魔法陣魔法＞はいぢいぢ＜魔法陣＞を書かね
ばなりないと」

「？」

「カオルがやつたのは、それを省略してしまひ」とじや

「それで？」

「＜魔法陣魔法＞は、空氣の様にやうら中にある魔力を使つため、

魔力の少ない者や、大規模な魔法を使うときに使用する、
だが、＜魔法陣＞を書くために、ある程度古代語を理解せねばならん

らん

「さつかも言ひましたね、でも、今の興奮とせりつながるんです
？」

「さつき力オルはどうやった？」

「＜魔法陣＞を見て、憶えて、＜詠唱魔法＞で＜展開＞？」

「見て、憶えて、＜詠唱魔法＞だけじゃろう？」

「は」

「要するに、記憶の中の＜魔法陣＞を外に引き出すだけ」

「そうですね」

「いいで、もう一度＜魔法陣魔法＞の特性を言ひておひへ、
一度使つた＜魔法陣＞は消える」

「うん」

「魔法を使うたび＜魔法陣＞を書かなければならぬ、
が、力オルがさつきやつたのは、一瞬で＜魔法陣＞を
出現させること、ソレが意味することは・・・」

「＜魔法陣魔法＞の打ち放題？」

「そりじゃ！！力オルは＜魔法陣魔法＞界に革命を起こしたのじや
！」

「魔法陣」を覚えさえすれば、誰でも、簡単に＜魔法陣魔法＞を使える！
使える！…

「どう訳、じゅ」

と、まあ色々あつたが、自分にも魔法が使えるっぽい。
嬉しい。今度、いろいろ試してみよう。

「じゃあ、帰るとするかの」

「はい」

家に帰ってきた。自分の家ではないので、この表現は微妙な気もするが、

「じゃあ、『ご飯にするかの』

そう言つてゼイスさんが、『ご飯の準備を始めた。

「フヨリシア、この世界つて男は台所に立たないんじゃなかつたの？」

「普通はね、でも私たちの家では、毎日交代でしてゐる」

「ふうん」

「明日から、カオルにもしてもらひわよ」

「ええつ！？」

「一緒に暮らすから当然でしょ？それに、カオル料理それなりにできるんでしょ？」

「確かにそう言つたけど・・・知らない食材ばっかりだから、どんな料理になるかは保証しないよ？」

「覚悟しとくわ」

「ところで、ここひて森の中だけビ、どうやって食材を仕入れてる

の？」

「家の庭で育てたり、森でとつたり、あと下の村に買いに行つてるわ」

「お肉とか食べる？」

「肉？カオル肉嫌いなの？」

「好きだよ、いや、そういうことじゃなくて」

「肉つてどうやってとつてるの？」

「狩りね、あそこには弓があるでしょソレでとつてる、まあ街に行つたら、町のそばで畜産をしてるから、肉屋で売つてるけど」

「狩り……」

「カオル狩りに興味あるの？」

「いや、無い訳でもないではないけど、いや、

僕の国つて、狩りをする人なんてほとんどいなかつたから

「じゃあどうやって肉を手に入れてたの？」

「どこの村、どこの町にも絶対に、何でも売つている店があつてそこで売つてた」

「でも、そんな店があつても村に狩る人間がいないんじゃ、新鮮な肉は手に入らないじゃない」

「えつと……色々なところに畜産農家がいて、そこから全国各地に配送されたり、他の国から輸入したり……」

「他の国？」

「そう、僕の国は周りが海に囲まれてて、海の向こうの他の国から・・・」

「国がいくつもあるの？」

「え?・・・そう・・・だけど?」

「面白そうね・・・」こには、一つしか国が無いから・・・

東の国と西の国の一いつだけ

「へえ~ そなんだ

「あまり驚かないのね?」

「（）にこる時点で驚きだからね」

「まあ、それもそうね」

「それで・・・肉は、どうやって運んだの？・どうやって鮮度を保つたの？」

「凍らせて」

「凍・・・らせ？何で？」

「肉とか野菜とかって、凍らせると鮮度が落ちないんだよ、

それに、凍らせたままだつたら長期間保存できるんだよ」

「へえ～知らなかつたわ、冷やしたら長持ちするぐらいは知つてたけど」

「じゃあ、冷凍庫・・・物を凍らせて保管する箱みたいなのは無いの？」

「ないわね、冷やす箱だつたらあるけど」

「ふーん、じゃあ今度作ろう」

「え！？作れるの？」

「魔法もあるし作れるんじゃないの？」

「さあ？誰もやつたことないし・・・」

「じゃあ、やつてみよう」

「することができた。」

「冷凍庫の作成、魔法があるのできっと大丈夫だろ？。」
「冷凍庫ができたら、色々な料理、主にお菓子ができるので、
早めに作りたいと思う。早く、アイスクリームが食べたい。」

「できだぞい」
「じゃあ食べよ？か
「いただきま」

晩ご飯は、お粥みたいなのと、厚切りのハムを焼いたものだった。
おいしかった。

明日は、僕が晩ご飯を作らないといけない、何にしようか？

第15話『お買い物の』

突然だが、今僕達は村に来ている。

魔法を教えてもらつてから三週間がたつた。

時がたつのは早いものだ。

では何故、村に来ているかといつと、そう、買い物だ。

「カオル！…早く、こっち！…」

「ちょっと、ちょっと待ってフエリシア」

「早く、早く！…」

「ほつほつほ、そう急かすな、時間はたっぷりとあるわい」

「ゼイスさん、時は金なり、ですよ、過ぎた時間はもう戻つてこないんです、

でしょ？カオル」

「確かにそうだけど……」

あれから二週間、じちらの言葉や習慣、常識を僕は必死になつて覚えた。

そして、フエリシアには日本語・・・古代語を教えた。

その一環で、ことわざなどを教えたが、どうも気に入つたようだ。

この買い物は、この世界で生活を送るだけの、力を身に着けたか
を測るために
いわゆるテストみたいなものだ。
そのはずだったのだが・・・

「カオル！ 次こっち、これ着て！」

「まつ、またこんな！..無理、イヤ、ダメ、着ないから！..」

「..

フェリシアがひつきりなしに服を着せようとじてぐる。
それも、フリフリのとてもかわいい服を、

「似合つていらっしゃいますよ？」
「店員さん！ 煽らないでください！」
「こちらなどどうでしょ？」「..」
「それも、いいわね、カオルどっちがいい？」
「どっちも着ません！..」
「そんなこと言わないで～、ほら～こんなにかわいいんだよ？」
「可愛いから着たくないんです！..」
「では、こちらなどいかがでしょうか？」
「いいわねそれ、凛として知的な感じ！ カオルこれは？」
「いや、女物でしょ？ それ、女物はイヤだよ、
男が女物を着てると、変態だと思われちゃうよ」
「..」
「..」
「『この娘は何を言つているの？』みたいな顔しないでください！..」

「どうか、フェリシアは僕が男だつて知つてるでしょ！？」

「…………あ…………ああ？うん…………うん、分かってるわよ？」

「疑問形！？まだ納得してなかつたの！？男だからね、オ・ト・」「

「なんですか？」
「…男？」
「…ちょっと失礼いたします」

ぺたり

と僕の胸を触る店員さん

「 · · · 男 ? · · · 女 ? · · · 男 ? ? ? ? ? ? 」

「ちゅうと、こつまで触ってるんですか……恥ずかしいです……」

無いでしょ？胸なんか・・・男ですしあ

「あつ、すいません・・・確かに胸はありませんが・・・

失礼ですか、胸の無い方だつてゐるに、まし……」

ち
じ
う

とフェリシアさんの方を見やる店員さん。

(いや、それは失礼にも程があるんじゃないかな！？)
(フェリシアは確かにちょっとアレだけど・・・)
(確かに店員さんより細やかな物しれないけど)
(まだ子供だし、見込みはあるよ！！・・・たぶん)
(あ・・・目があつた)

「カオル？今ものすゞく失礼なこと考えてない？」
「！？い、い、否、な、何も考えては！」せらんよ？」
「あはっ、話し方が変よ？」

フェリシア、笑顔が怖いよ、笑顔つてこんな怖い物なの？
怖すぎて、こちらの言葉ではなくて日本語で話してるけど、
この際もひびひでもいいや、

「あ、ああ、コレはね、僕が住んでた時代よりも、
百何十年ぐらいた昔の言葉なんだよ」
「ソレを、今なんでこの状況で出してくるのかな？」
「え、いや、それは・・・」
「カオル」
「すいません」
「・・・カオルって、男の子なのね・・・」
「・・・うん」

（男つて認められたのは嬉しいけど・・・
（嫌な感じだな・・・）

「で、では、男性物を用意しますねー。」

店員さんが重い空気を換えようと、明るい声で服を探し始めた。

(あれ? 今の原因作ったのは、店員さんじゃ?)

なんとなく、理不尽を感じながら店員さんを待つ。

「これなんかどうでしょつか?」

店員さんが持つてきたのは、村の皆が来ている様な普通の服。
今着ている、学校の制服と比べて、良いとはさすがに言えないが、
紡績技術だって、そんなに進歩していないかもしない。
自分は家の工場の手伝いをしていて、機会にそれなりに詳しい
と言つても、工作機械とか、家でお遊びで作ったような物だけだ。

閑話休題。

この黒い髪 자체が、結構目立つらしいので、

これ以上目立つのは嫌なので、コレを買つこととする。

「じゃあ、それで」

「ダメ！カオルはこっちの方が似合つ！」

「似合う似合わないじゃないからー店員さんコレいくらですか？」

「・・・え、ええ銀貨三枚ね」

「はい、銀貨三枚です」

ここで、この世界のお金について説明しよう、
と言つてもすぐ簡単である。

この世界には、銅貨、銀貨、金貨があり、銅貨百枚で銀貨一枚、

銀貨百枚で金貨一枚の価値がある。

正確には、日々その価値は変動しているが、商人以外の人間には
あまり関係がない。

「ご利用、ありがとうございました」

「また買いに来ます」

服を受け取った僕は店の外に出る。

「あ、ちょっと待つてカオル」

「ん？」

「ありがとうございました」

「フエリシア、何か買つてたの？」

「うん、さつきの服をね」

「さつきの？・・・ああ！－アレ買つたの！？」

「うんつ」

「うんつて、着ないからね、絶対着ないからね！？」

「・・・え？」

「悲しそうな顔したつて着ないからね！？」

買い物はまだ続く。

第1-6話『クラスメイツ(1)』(前書き)

えー

突然ですが、場所、時間が大きく変わります。
というか、カオルくんがトリップしちゃう日の朝まで戻ります。
主人公が変わります。

第16話『クラスメイツ(1)』

目が覚める。

いつもと変わらない朝。

いつもと変わらない、無味無臭、無味乾燥、無色透明な朝。

時計を見る。

時刻は午前8時3分。

いつものように準備をしていたら、学校に遅刻するだろ。う。別に遅刻してもいいが、目立ちたくない。

幸い、自分は一食ぐらい抜いても不自由しない人間なので、朝食は食べずに学校へ行こう。

顔を洗い、歯を磨き、寝癖を直し、服を着替える。

時計を見る。

午前8時12分、今すぐ家を出て何もなければ、余裕で間に合ひだらう。

家を出る。家族は居ない、家族は十年前に事故で死んだ。

そんな学生なら普通、施設に居るものだろうが、その施設も三年前に焼け落ちた。

今、自分の住んでいる家は築三十年超のアパートだ。

そんなオンボロアパートに住んでいる理由は一つ、家賃が安いからだ。

学校までは徒歩だ。自転車で行つてもいいのだが、徒歩で行く。理由は特はない。

交差点に差し掛かる。人が歩いている。

人、人、人。

彼らは、本当に生きているのだろうか？

いや、生きているのだろう。

そんなことを聞いたら変人だと思われるだろう。
だが、そんなこと聞く資格すら自分はない。
死んでいないだけの、人間には。
生きていかない、人間には。

「遅かつたじゃないか、かず君」

『かず君』が何処かにいるのだろうが、自分ではない。
何故そう言い切れるかといふと、『かず』なんて字は自分の名前に
はないからだ。

「何故無視するんだ、かず君」

どうやら、『かず君』は無視しているらしい。
だがそんなことを気にしているほど、自分は暇ではない。

「逃げるな――――（にのした　ひふみ）――」

どうやら、『かず君』は自分だつたらしい。

『大人しい男子高校生』の『仮面』を被る。

人は、皆『仮面』を被つて生きている。

そんな話を聞いたことがある。人に見せる顔、裏の顔、真の顔。

自分が被る『仮面』もまた、その一つだ。

「な、何？」

「遅かつたじゃないか、遅刻するぞ、かず君」

自分を『かず君』と呼ぶ人物。

光賀 光（こうが ひかり）。

金髪碧眼、祖母がイギリス人でその地が色濃く流れているそうだ。

その顔は整っている。美少女、というより美人に入るだろう。

その体も顔にあって、完璧なプロポーションである。

性格も良好、非を打つところが全くなき。

名前の通り、光のような人物だ。

彼女は自分の通つている学校の生徒会長である。

天才、才色兼備、文武両道、完璧超人、天上天下唯我独尊、etc・

・・・

数々の呼び方をされているが、そのすべての人があくをそろえてて言うのは・・・

「なんで『かず君』なんですか？『最強』さん」

「『最強』ね・・・人を称号で呼ばないでくれるかな、嫌なんだよそういうの、なんか愛が無いっていうか、分類で呼んでるみたいな感じがね」

「そうですか、何で僕のことを『かず君』って呼ぶんですか？『最

強』やん」

「む・・・まだそう呼ぶか・・・
まあいい、君の名前は数字ばかりだらう、ただそれだけだ、意味
はない、

そんなことよつー遅いー遅刻するやー。」

「そうか、『かず君』は『数君』か。
まあ、どうでもいいが。

「大丈夫ですよ、本鈴が鳴る前には付きます」
「それではダメだよ、かず君、予鈴が鳴る前に席に座っているのが
セオリーだよ」

「そうですか、じゃあ少し早く歩きますか」
「ああ、そうしてくれ・・・つと雰囲気に流されていた、
かず君、今日こそこそは更生してもらひだ」
「はあ・・・またですか」
「そう、まだだ、かず君は全然更生しないな」

「そつ、『最強』こと光賀さんは自分を更生させようと度々、
いや、しおりちゅうなんらかのアプローチをかけてくる。

「更生も何も僕、悪いことなんかしてないでしょ」

「そう言わればそうなんだが、かず君はなんか危ない感じがするんだよ」

「危ない？僕が危ないやつに見える？」

何故だ？虫だつて蚊や「キブリぐら」しか殺せないのに。教室でも壁のシミ、もしくは空氣、あるいは机と一緒に化していくといつのこと。

「いや、違うな・・・危ないじゃなくて・・・危ういか・・・」「危うい？」

「いや、聞き返されると困るんだが・・・まあ、勘だよ勘、そんな感じがするってだけ」

「それだけですか？」

それだけの理由でいつも付きまとわれるいつかの身にもなつてくださいよ

更生をせるべき相手はほかにもいるでしょう、ほら、そこにはいる影山君とか

自分が示す場所にいる人物。

影山 影鷹（かげやま かげたか）。

黒髪黒目、まるつきり純粹な日本人である。

イケメンである。身長も高く、光賀さんと並ぶと、学校の光と闇が並んでいるような錯覚を受ける。

そんな彼は風紀委員だ。学校に乗り込んできたヤンキーのチームと

ウチの学校のチームの戦闘を全員倒すことによって止めるという偉業を成し遂げた、

というのはこのあたりではとても有名な話だ。

その大乱闘は自分も見ていた。人が十人単位で吹っ飛んでいた。

彼はいつも何かにイラついていて、みんなに怖がられている。

「刺激したら、何かまずいことを言つたら吹っ飛ばされるのではないか」と。

それゆえについたあだ名は『最恐』。

「たか君か・・・たか君は大丈夫だ」

「なんですか？」

「あいつは私の幼馴染だ」

「へゝそうだつたんですか」

普通の反応、普通の返事で返す。

「反応が薄いな？・・・人にこの話をすると大概、驚かれるんだが」

疑惑の顔で自分を見てくる光賀さん。

「え？ そ、 そうだったんですねか！？」

「なぜ驚かれると言つてから驚かれたんだ？」

「は、 はは・・・驚きすぎて」

「・・・やうか・・・？」

危なかつた、 危うく自分の『仮面』が剥がされかけた。『仮面』が剥がれてしまつたら、 とても困る。

「たかぐーん！..！」

光賀さんが『たか君』、『最恐』！と影山君を呼ぶ。

「ん？ よお、 光」

影山君が振り返る。

「ん？ 誰だそいつ」

「覚えていないのか？ というか同じクラスだぞ、私たち」

「ん～？ ・・・ ああ、俺の前の前に座ってる奴か」

「一 一二三です」

「いいつていいって、さつきのは冗談、ちゃんと覚えてるから」

そう、覚えているのだ。

影山君は、ウチの学校の全生徒のプロフィールだけでなく、ウチの生徒にかかる人間のプロフィールすら覚えているのだ。と言つても、自分の隣にいる『最強』も普通にしていることだ。もちろん、自分にはそんなことはできない。

人の名前すらまともに覚えることができない。

「で？ 誰が俺が更生したほうがいいって？」

「え！ ？ ・・・ いやつ、そ、それは・ ・・

「ん～？ ・・・ 言えないのか？ ・・・ そりゃあ～言へんよな～」

「影山君です」

「はつきり言つなあ、オイ！」

ペシッ、と頭を叩かれる。

吹つ飛ばない、そりやそつか。

この人は、『最恐』なんてあだ名がついていても、

この人の本質は優しさだから。

第16話『クラスメイツ(1)』(後書き)

不安になりつつの投稿。

カオルくんのクラスメイトの話でした。

もう一話続いてから、カオルくんのお買い物の話に戻ります。

第17話『クラスメイツ(2)』

ウチの学校は異常がありすぎる。いや、ありすぎて困る。特に、自分のクラスとか・・・。

教室のドアを開ける。

目の前を塞ぐ大きな体。

「お、おはよう、五里山君」

「ウホ、おはよう、二ノシタ、コウガ、カゲヤマ」

「うむ、おはよう」

「おひ」

顔を上げる。

そこには、黒い肌、出っ張った額、平たく穴の大きな鼻、突き出した
脣、

太い眉、もみあげからおでこへ一つながりに繋がった眉。

そこにあるのは、『ゴリラ顔、といふか』『ゴリラ』の顔そのものだ。
といふか、『ゴリラ』だ。

『ゴリラ』が制服着て、一足歩行して、話している。

「前から気になつてたんだけど・・・五里山君つてさ、話すとき
ウホ、つて始めに言わないと話せないんですか？」

「話せるぞ、それにカタクトなのもわざとだし、そもそも・・・」

「やめる五里山、それ以上やるとキャラが崩れる」

「ウホ、スマン、カゲヤマ」

「うむ、それでこそ『ゴリ君だ』

そんなブレた会話は放つておいて、自分の席に向かつ。
いや、『ゴリ君』はないだろ、そのままさぎる。
まあいいか、人のあだ名なんか。

そこにはすでに先客がいた。

自分の席で気持ちよさそうに、枕まで使って寝ている。

寝言から始まり、ボケツツ ハハハとつながり、話題の一重並行ところ
う荒業をなしつつ、

「ふわあ～・・・まだ眠いにや、かず君先生が来たら教えて」

「そうですか」

「昨日はよく眠れましたか?」

「よく寝たにや、十四時間べい」

「しっかり、がつづり、寝てますね」

「猫は寝るのが仕事だにや」

「世の中金だからこへ」

「猫に小判じやないんですか?・・・おはよう!」

「おはよう!・・・あひとその猫は小判の価値を理解してない」

「やうですか、じゃあ、何で使わないんですか?・・・どこへだ

「ははは~私の席」

「じやなかつたかにや?・・・れひと使い道が

「それもありえますね・・・違いますよ、隣です」

「んにや、ほんとだにや、寝ぼけてたに・・・あひとやうだにや」

「朝つぱらから寝ぼけないでくだせー」

「朝つぱらだから寝ぼけるにや、猫は夜行性だから」

「昨日はよく寝れましたか?」

「ほひ、起きてくだやー、猫さん」
「ひにや~・・・あ~・・・お魚~」
「あなたはドラ猫くわえたお魚ですか」
「違ひにや~そこは、お財布くわえたドラ猫だにや~」
「現実的ですね」

自分の席に座る。

・・・『かず君』がいつのまにか定着している。

自分の席に座る。

『猫』さん。

あだ名の通り、猫のような人物。

常に両耳を装着しており、よく眠る。

さらに身体能力も猫並みである。

夜目が効き、高いところに容易に飛び乗り、音もなく走る。

魚好き、動くものに田^タが無い。

「」までで良く分かるように、この学校、自分のクラスはおかしい。はつきり言って異常だ。

『最強』と『最恐』から、『ゴリラ』と『猫』、グレイタイプの『宇宙人』、転生したものの生まれる世界が間違っている『スライム』、『ロボット』であることを必死に隠そうとする者にそれを作ったと公言する『博士』、「お化けなんていない!私はエネルギー生命体だよ!...」と言い張る『幽霊』、出席しているはずなのに姿が見えない『永久欠番』、どんなことがあっても無言を押し通す『完全言語』、そいつに話しかけることを生業とする『数の暴力』、使うのはもっぱら科学的な武器の『魔法少女』etc...、
・・・本当に異常だ。

教室を見回す。

隣の席には、気持ちよさそうに眠る『猫』。

楽しそうに話し合っている（・）、『完全言語』と『数の暴力』。タイムマシンについて熱く語り合いつ『博士』と『ロボット』と『幽靈』と『魔法少女』。

「どうか、出来たよ、タイムマシン」

「？」

「今度乗せて！」

「ダメ」

「え〜なんでも〜」

「乗つたら、タイムパラドックスやバタフライエフェクトとかで世界が変わつて大変な事になる」

「う〜・・・それなら仕方ないや・・・」

・・・な、なんだと！？

体を使った一発芸をする『スライム』と、それを見て笑う『ゴリラ』と『宇宙人』。

「かおるちゃん、じゃあまた、放課後待ってるからね」

「うん、またね・・・つてまたちゃんと付け！ちゃん付けはやめて！」

「バイバーイ」

「行っちゃった・・・おはよう、みんな」

「うむ、おはよう、かーちゃん」

「うつす、さつちゃん」

「ウホ、おはよう、サクチヤン」

「かあるちゃん、おはよー」

「・・・僕、泣いてもいいかな」

涙目だ、力オルちゃん、可愛い。
みんなの顔がほこりんているのが分かる。

『美少女』、櫻井 薫。

この学校きての美少女だ。

本人は、男だと黙って、頑なに女であることを否定している。
家が工場で、たまに学校に来るとき、黒い油を顔に着けてくること
もある。

当然、それを拭うというイベントが発生し、その『拭つてあげる』
という立場をめぐり、
度々大乱闘が行われていたりする。

うん、いつもながら皆仲が良くて、異常で、楽しいクラスだ。

第17話『クラスメイツ(2)』(後書き)

カオルはとんでもない学校に通っていました。
異常事態に見舞われているのに、割と冷静なのはそのせいです。

第1-8話『お買い物・・・証跡隠して』（前編）

総PVアクセス数三万突破しました。

お読みいただき、ありがとうございます。

第1-8話『お買い物・・・武器屋にて』

むう～～・・・どれにしよう・・・

「カオル！早く決めて！」

「そうは言つてもね、僕こんな見たのも初めてなんだよ～」

「そんなの、適当でいいから」

「そんなのつて・・・さすがに適当じゃダメでしょ」

「も～、早くしてよね！私、外で待つてるからー。」

「うん」

僕は今、買い物の続きで武器屋に来ている。

正確には『ガラタクの武器防具店』だ。

買い物の続きで、身を守るためにそういうモノもいるといふことで
買いに来た。

それで武器を選んでいるところだけど、全くもつて何がいいのか分
からない。

剣？・・・剣術なんてできない。

ナイフ？・・・持つことがある刃物は包丁位だ。

杖・・・は無かつた。

斧？・・・無理だー！

結論・・・僕にはどれも使えない。

「ねーまだー？」

外から声が掛かる。

「ん？ 嬢ちゃんコレだけでいいのか？ といつかコレ持てるのか？」
「嬢ちゃんじゃないです、僕には魔法があるのでコレだけでいいし、
ちゃんと持てますよー」

七

「む～・・・頑張ります・・・」

「頑張れよ！」口愛し嬢ちゃんが店に来ただんだ
ソレの値段は負けてやる

銀貨十枚でいい」

「本当にですかー!? ありがとうございますー!」

銀貨を十枚出す。

負けてくれたと言つたけど元の値段はどれくらいなんだろう?
でも、それを聞くのは野暮な気がする。
もう一度お礼を言つて店を出よう。

「ありがとうございましたーー。」

「ああ、また来なーー。」

店の外に出ようとしたとき、入ってきた人とぶつかってしまった。

「す、すいませんーー。」

頭を下げる、そして顔を上げる。

「ああー？ん、おおー君可愛い顔してんじやん

あ、コレ面倒なタイプだ・・・。

「いじょいじょ、君この村の娘?俺、冒険者でさー」の村に来んのはじめてなんだよね、ちょっと案内してくんない?」

そう言って、手を伸ばしてくれる。

コレは、ナンパだろう多分。

彼が言う『冒険者』は、魔族と人間種の戦争後にできた職業で、国経営の職業凱旋所、ゲームで言うなら『冒険者ギルド』で働く者のことだ。

『冒険者』は国や民間人からの依頼を受けて働く派遣社員みたいなものだ。

いや、今はそんな説明をしている場合じゃない。

ここでわざわざ『冒険者』を名乗るということは、言外に、

『俺は強いんだぞ』と脅しかけているということだ。

僕は、ひらりと『冒険者』の手をかわす。

「すいません、僕この村に来たばかりで、あまり詳しくありません、

ですから案内ならほかの人に頼んでください

といつも、今日ははじめて來た。

僕は踵を返し店を出・・・

「ちよつと待てよ」

「ちよつと待てよ」

よつとしたら、肩をつかまれた。
痛い、結構な力だ。

「痛いっ、何するんですかっ、つつ、離してください！！！」

「下手に出たらいい気になりやがって、ちょーーーーと案内しても
うづだけつてんだろ？その先でナードをするかまでは言つ・・・ぎ
やあああ」

『冒険者』の言葉が途中で途切れ。

それは何故か？

それは、僕が投げ飛ばしたからだ。

悲鳴の方は知らない、店の観音開きの扉の向こうで見えないからだ。

『投げ飛ばしたからだ。つて何！？』と聞かれるかもしれない。

僕には悩み事がある。それは初めに言つたはずだ、それに伴つモノ
も。

そう、ナンパだ。僕はよくナンパされていた・・・男に。
その時たまに、今みたいに暴力に走ろうとする輩がいた。

その度に何処からか、クラスメイトの『最強』こと光さんや、

『最恐』こと影山君や、担任の『先生』が飛んできて助けてくれた。
でも、それじゃダメだと思った僕は、『最強』と『最恐』、

その一人に『僕を強くしてください』と頼んだ。

光さんは『おお、そうかそうか、強くなりたいか』と快く了承してくれて、

影山君は『どれくらい強くなりたい?』と聞いてきて、『自分の身を護れるぐらい』

と答えたなら『そうか』とニヤリと笑いながら頷いた。

そうして、僕の強くなるための特訓は始まつた・・・。

血反吐を吐く・・・ような事は無かつた。

始めのうちは筋肉痛とかが辛かつたけど、そのうちそれも無くなつた。

光さんと影山君が教えてくれたのは、力をつけるための筋トレと、
護身術。

どちらも僕が知らないものばかりでとても楽しかつた。

そして、僕は暴力を振るつてくるような輩を撃退できるぐらい強くなつた。

とまあ、長々と説明したけれど、僕はそれなりに強いのだ(えっへん)。

「お~、やるなあ嬢ちゃん、もうちょっとしたら今の奴叩き出す所だつたんだがな、

大丈夫か?怪我はないか?」

「大丈夫です、ちょっと肩が痛いですが・・・」

「どうか、嬢ちゃん、コレもおまけだ」

ガラタクさんが何かを放り投げた。

「え？ ちよーっとと・・なんですか」「」

「お守りだ、まあ、嬢ちゃんにはまだいらないと思つがな」

「へーーー・・・お守りかあ、コレなんのお守りなんですか？」

交通安全とかかな？ でも、魔法とかがあるから精霊の加護・・・みたいな？

ガラタクさんは一やりと笑つて言つた。

「安産だよ」

第1-8話『お買い物・・・武器屋にて』（後書き）

どうせ、真島 真です。

後書きは何を書いたらいいんでしょうか?
よく見る『感想・』指摘お願いします』
みたいなことでしょうか?

それとも『ネタ切れだ――!』
でしょうか?

正直私は文を書くのが苦手です。
話を考えるのも苦手です。
設定を考えるのも苦手です。

はい、全部苦手なんです、すいません。

ですので、この小説を楽しくするために、

どうか皆さんのお力を貸して下さい。お願いします。

第1-9話『闇の中で』（前書き）

視点変更が多くてすいません。
でも、まだまだ増える予定です。
今回は、ヒツミ視点です。

第19話『闇の中で』

暗く明るい闇の中。

上も下も右も左もない黒の世界。

見渡す限り 人人人

い、も見てしるよ、な風景

人が、生きている。

「ヒツジは何所だ?

暗い・・・
明るい・・・
黒い・・・?

「ヒツジがビリヒリリ?」

「あれ? なんでひーちゃんがこんなところに?」
「カズ、おめえー何でこんなところにいるんだよ?」

ヒツジ? ・・・変な名前? ・・・なのかな?
ひーちゃん? ・・・って誰のこと?
カズ? ・・・誰だ?

「ヒツジ、何言つてんの?」
「キツジはひーちゃんでしょ?」
「何寝ぼけたこと言つてんだよ、カズ」

ヒツジ? ・・・それが僕の名前?
ひーちゃん? ・・・私はそう呼ばれているの?

カズ・・・俺の名前か・・・?

「そうだよ、『ノシタ ヒツ』」

「それが、キミの名前だよ、『ひーちゃん』の『ひー』は『ヒツ』の『ひ』」

「そんで、『カズ』はお前のあだ名で・・・」

「ノシタ ヒツ・・・ああ、思い出した
ひーちゃん・・・そう呼ばれてたつけ?」

カズ・・・の説明はいいや・・・なんとなく分かるから・・・

「じゃあ、もしかして」

「私たちのこと・・・忘れちゃってる?」

「いらんつて・・・本当に要らないのか?しないぞ?説明

もしかして・・・昔飼つてた犬のボチ?

近所に住んでた猫のタマ?

よく狩つてたオッサンの五郎?

「違うね」

「違つわね

「ちばーよーなんだよ、狩つてたオッサンってー!?

違つか・・・

やつぱり?

え?・・・ウソだろ?

「僕は×××

「私の名前は
」

「合つてゐる自信あったのかよー?俺は

「

僕の名前は・・・
つてみんな知つてるのか・・・
ていうかさつき教えてもらつたしな

そうだ

聞きたい事があつたのよ
ここはなんだ?

「え~と・・・

「…………」

「…………死後の世界だ」

死後の…………

…………世界！？

俺は…………俺は死んだのか？

「分からぬ？」

「私たちは死ぬ時の記憶があるの」

「覚えてないか？」

ちょっと待つて…………思い出してみる…………

…………うへん…………思い出してきた…………

いつものように帰つていて…………いつもの学校の帰り道…………

そしたら…………いつもみたいに

『最強』と『最恐』の二人が来て…………

たわいもない会話をしてて…………

黒い・・・黒い・・・ああ・・・

あ、
穴が
・
・
・

「穴が？」

六?

「穴がどうしたんだ？」

あああああ

ああつ！

「？」

「どうしたのー? ひーちゃん! ?

「おい！大丈夫か！？」

ああああ
・
・

・・・あああ・・

あああああああ
・
・
・
・

「大丈夫？」

「何が・・・何があつたの？」

「・・・・・（言う事が余つてねえ）」

・・・・・うん

穴が・・・穴がね・・・

歩いてたらこう・・・

いきなり何もない所から出てきて・・・
その穴を見て・・・

ヤバイ！―つて思つたんだよ・・・

でも・・・

でも体が動かなくて・・・だけど『最強』と『最恐』は動けてたみ
たい

・・・んで呆然としてたら・・・

その穴から・・・ブウワア～～～つて
グワア――――つて腕みたいなのが沢山出て来て
その腕が俺に迫ってきて・・・

後ろから『最強』さんが何か叫んで……
『最恐』くんが動くのを感じて……
そんで……

「気付いたら……」

「ここに居たと……」

「ん〜〜〜……それだけじゃ死んだか分かんねえな」

「・・・そうだね・・・分かんないね」
「なんかそれじゃ死んだというより」
「取り込まれた・・・もしくは、引き込まれた、だもんな」

「僕達には記憶があるんだよ」
「死ぬ時の記憶がはつきりと」
「例えば、火に焼かれた！～とか、刺された！～とかな」

そう・・・なんだ・・・
みんな・・・
苦しい思いをしてたんだな・・・すまん

「なんで君が謝るのや」
「私たちのこと憶えてないんでしょ？」
「なら謝る理由も無いだろ？」

いや・・・謝らないといけない気がする・・・「めん
皆・・・」めんなさい
・・・本当にすまなかつた

「そんなに謝られても・・・相手悪くなことは・・・（本当に）

「・・・（本当に忘れたんじゃないのかも）」
「・・・（心の奥で自分が悪いって思つてんのかもな）」

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

「ほつ、ほら！…そんな湿っぽいのはなし！…」

「まだ死んだつて決まつたわけでもないんだし！…」

「たまにいるんだぜ、生き返るやつ」

・・・うん

・・・分かつた

・・・生き返る？

「いや、正確には分からんだけね・・・」

「まだここに来て間もない人とか、ある程度時間がたつた人とかが
たまに・・・」

「光に吸い込まれるんだよ」

へえ～～～・・・

そななんだあ～～～・・・

でも後のは成仏なんじやないか？

「それはないよ」

「よく考えてみて？」

「ここが死後の世界だぜ？」

・・・！？

本当だ・・・

・・・気が付かなかつた

・・・あ

「噂をするとほら・・・」

「・・・ああ、来たな」

何?
來
た?
何
が?

カツ！-と降り注ぐ強烈な光。

・・・え？

ちよつと待つて！！

まだ話したいことが・・・話さないといけないことが！！

「大丈夫だよ」

「またここに来たとき話せばいいんだし・・・
「俺等はお前から・・・離れられないしな」
「

光に吸い込まれる身体。

変わらず僕を引っ張り続ける強力な力。

・・・この感じ
初めてじゃない!?
もしかして・・・っ!?

忘れていた記憶がフラッショバックする。

『みんな』の記憶。

自分の周りで死んでいった『みんな』の記憶

自分は・・・!
私は・・・!
俺は・・・!
僕は・・・!

『みんな』に言わなきゃならない」とだが――

「……やつと思い出したか」
「……でも、またお別れね」
「……ああ、またな」

『みんな』…………！？

そして、光がヒフミを取り込み、
強烈な閃光を発し、それが消えると、
そこには、初めから何もなかつた様な、
暗く明るい闇が残つてゐるだけだつた。

第20話『目が覚めて・・・』

「・・・・・・『みんな』・・・」

手を伸ばすが、そこにあるのはみんなの姿ではなく、あの闇の世界でもなく、

知らない天井だった。

知らない天井・・・。

ああ、きっとアレを引き起こした張本人の家かなんかだらう。そんなことに興味はない。いや、それなりにあるが。それよりも・・・。

「『みんな』・・・」

(・・・あれ? ヒフ//?)

(ホントだ、やつほー)

(なんだ? どつから声が?)

「つえつー?」

声がする・・・さつきも「会えないと」と思った『みんな』の声が。

「『みんな』？・・・『ビーバー』の？」

(・・・せつめいと回りじとりだけど?)

(皆でひーちゃんの昔話してたと同じだよー)

(ああ、変わりなくあの世・・・死後の世界だ)

「『みんな』の声が聞こえるんだけど?」

(うん、僕たちも)

(ひーちゃんの声、聞こえてるよー)

(不思議だな)

「不思議だ・・・つてこや、それビーバーじゃなし気がある」

(へ?)

(うー?)

(なにが?)

「そりゃあ・・・」

(そりゃあ?)

(ん~?)

(なんだ?)

「・・・・・・」

(・・・・・・)

(・・・・・・)

(思いつかねえのかよーー)

- うん・・・なんだろ? 大変な氣もするし、やうでない氣もある・・
- みたいな? そんな感じ?

(・・・・・)

(・・・・・)

(みたいな?じゃねえよーーー)

いや、そんなこと聞かれててもね? まう・・・ね?

(・・・・・ねえ)

(・・・・・わから)

(ね? じゃねえよーー 大体お前いつも

考えてるような顔して何も考えてねえじゃねえか! !)

それは酷いよーー自分だってそれなりに考えてるよーー
今月の食費の事とか、バイトの事とかーー

(ちょっと待つて二人ともーー)

(止めてーー)

(この苦学生がーーーって、なんだ?)

「なに?」

(よし)

(えーとーーーじゃあひーちゃん、何か考えてみて

(どうしたんだ? いきなり)

「考えるつて何を？」

（なんでもいいよ）

（好きなものとか、好きなものとか、好きなものとかでいいよ）

（それ選択肢が一つしかねーじゃねーか！！）

「それ選択肢が一つしかないよー！」

（ちょっと黙つてて）

（静かに）

（・・・すまん）

「じめん」

考える・・・何を考えようつか？

好きなもの？・・・別にないな。

よしー！何も考えないでおこう。

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・

（・・・・・うん）

（・・・・・聞こえるな、声が）

「えー？嘘ー？」

もしかして考えてることが筒抜けなのか！？

いや、そんなはずは無い！！

自分は何も考へいないはずだ！！

(いや、凄いと思ひよ？考へてって言われてるのに何も考へないな
んて・・・)

(さすがひーちゃん)

(でも・・・その前から全部聞こえてるんだよ)

ぬわあ～～！猛烈に恥ずかしい～～！

(ぬわあ～～！猛烈に恥ずかしい～～！)

(ぬわあ～～！猛烈に恥ずかしい～～！)

(ぬわあ～～！猛烈に恥ずかしい～～！)

「やめて…復唱しないで～～！」

数分間『みんな』からのいじめに悶絶していたら、自分の耳が物音をとらえた。

その音はだんだんこの部屋に近づいて来る。

ちょつと黙つて

(なに?)

(誰か来たりしたの?)

(ああ、分かつた)

そして、扉が開かれる。

そこには、『最強』さんとメイド?・さんがいた。

「『最強』……さん?」

「おお!…起きたか!…カズ君!…!」

抱きついてくる『最強』さん。

ちょつと苦しい。

大分苦しい。

とても苦しい。

「『最強』さん、どうしたんですか？」

「良かつた！！成功した！！」

「成功？・・・う・・・ぐ・・・くる・・・しい」

「カズ君は死にかけてたんだ！！」

死にかけてた？

うん、たぶん「死にかけ」じゃなくて「死んでた」よ？

それより今の方が「死にかけ」なんだけど？

そろそろ息が・・

「良かつた！！本当によかつた！！」

そう言つてからさきつゝ絞められる。

「・・・う・・・あ・・・『みんな』すぐそつちに行くよ

・・・ガクッ

「『みんな』久しぶり」

「久しぶり、何年ぶりくらい？」

「この前会つたのがついさっきのようと思えるよ～～～」

「おう、久しぶり、なんだ？十分ぶりくらいか？」

第21話『弾む話と進まないストーリー』

「あれ？ カズ君？ カズく～～ん？ ……あつ、死んでる！？」
戻つてこい！ 戻つてこい！ カズ君！ ……せいつ！！」

カツ

「眩しいなあ」
「確かにちょっと明るすぎるね」
「電気の無駄遣いだよ～～～」
「そうだな、いや、電気がどうか分かんねえがな」

カツ

「良かつた―――！ 死んだかと思つたよ！」
「今確かに死んでましたよ？ 僕」
「うつ！・・・すまない」
「まあいいですけどね、何回か経験ありますから」

「良かつた……つて、良くない全然良くない……」

「何？死んだ経験が何回があるだと？」

「ええ・・・わざ今まで忘れてたんですけどね、

今のでまた一回増えました」

「ぐつ！・・・すまない・・・といつか許してないだろカズ君」

「それで？」

「それでとは何だ？」

「この状況ですよ・・・何か知つてるんでしよう？『最強』さん

「あ、ああ、この状況のことな、ちよつと待つてくれ」

そう言つて『最強』さんが後ろにいるメイドっさんに向か話しかける。

そしたら、メイドっさんが部屋から出で行つた。

155

「↙空間遮絶↙・・・これでよしつと」

「『最強』さん、何なんですか？今の」

「魔法？」

「僕に聞かないでください」

「魔法・・・」

「言葉尻を濁さないでください」

「魔法！？」

「驚かれても困ります、つていうかそれはそっちのセリフです、

「さすがだなカズ君、起きたばかりなのにツツ『ミミガ冴えてる』

「起きたばかりなのに突つ込まないでください」

「厳しいなカズ君は、『飯を用意して息子の帰りを食卓で待つお母

さんの様だ』

「なんか優しそう」

「ただしその間お父さんも娘も食卓から動くことを許されない」「厳しい！！というか怖い！！」

「息子は34歳・独身・フリーター・持つている夢は大きい」「しかも悲しい！！」

「娘は再婚した夫の連れ子・25歳・独身・〇」「さらに入ってきた！？」

「息子と娘は幼馴染だった」

「なんか複雑！！」

「そして現在両思いだ」

「家族間で禁断の恋が！！」

「しかも実話」

「重い！重いよ！！『最強』さん！！

「だけど先が気になる！！どうなったんですか！？息子と娘は？」

「お母さんは？お父さんは？」

「その娘と息子が私の両親だ」

「なにいいいいいいいい！！！？」

「まあ、最初こそ揉めたらしいが、今ではいい思い出だそつだ」

「今明かされる『最強』出生の秘密！！

「このネタは良い値で売れるかもしない。」

「カズ君は『新聞部』には黙つてくれるよな？」

『新聞部』、ウチの学校で学校新聞などを発行している部といつ事になつてゐる。

表向きには・・・という前置きが付くが。その実態は教師も生徒も関係なく、暴いた過去や痴態などを校内で振り撒く、学校一の『嫌われ者』だ。

『新聞部』には『新聞部』のポリシーがあるらしいが・・・『新聞部』でない自分は知らない。

「いいえ」

「カズ君は『新聞部』には黙つていてくれるよな?」「良い値で売れそうなので断ります」

「カズ君は『新聞部』には黙つていてくれるよな?」「きつとこのネタは一万円ぐらいで売れます」「もうちょっとするんじゃないか?」「それ位が妥当じゃないですかね?」

「自分で言うのもなんだが『最強』のネームバリューは凄いぞ」「そうですね・・・そのことも考えないと・・・」「売るなよ?」「え? 売りますよ?」

「売つたらその時は潰すからな、具体的に言つなり、この腕で、物理的に

ふざけ過ぎた。

物理的につぶされるのは嫌だ、まして『最強』さんに潰されたらミートペーストになつてしまつ。

「レは冗談なんかじゃない、本気だ。

『最強』さんの腕力は、異常だ。

ホームに落ちた女の子を助けるために、電車を受け止めるぐらいいなのだ。

腕力どころの問題じやない氣もするが。

まあ、『最強』の名はダテじやないといつ事だ。

潰されるのは嫌なので話をそらす。

「……そんなことより！－！話がずれています。

『最強』さんが魔法を使うの初めて見ました。凄いですね、魔法

「『が』？もしかして、お前は魔法を見たことがあるのか？」

「？『魔法少女』が居るじやないですか、ウチのクラス」

「いやいや、それはただのあだ名だらう？」

「何を言つてるんですか、

そのあだ名通りのあなた言いますか『最強』さん、

じゃあ、『ゴコロ』の五里山君は何なんですか？」

「ゴリラっぽい人」

「なんですか？『つぽい』って、

じゃあ『スライム』の洲羅（すら）君は何なんですか？」

「スライム……もしかして、ウチの学校……

ウチのクラスつておかしいか？」

「おかしいですね……つてまた話がずれています」

「そうか……ウチの学校はおかしかったのか、
ん……どこまで話したつけ？」

「ああ、なぜカズ君のあだ名はカズ君なのか？だったな
「違います」

#わっこよーー！今まで引つ張るんだーー！

(話、進まないね)

(うん、でも楽しそう)

(・・・もしかして俺たち忘れられてないか？)

第21話『弾む話と進まないストーリー』（後書き）

何でだらり？

話は弾むのに話が進まない。

会話が八割を占めている。しかも、ボケヒッシーの応報がほとん
ど。

「よし、それじゃあ、話を元に戻して、宇宙誕生について話そつか」

「元に戻ってません」

「そうか、なら鳴海の渦巻の中心にかかる力について……」

「もういいです、疲れました」

本当に疲れた、この人は頭が良いのにその能力を發揮する場所を間違えている。

「（1）疲れた（2）憑かれた（3）突かれた（4）掲かれた、さあどれ？」

「1番です」

「ファイナルアンサー？」

「ファイナルアンサー」

卷之三

「何だつて！？僕は憑かれていたの！？何に！？」

まあ、心当たりは無い訳ではないが……
(む・・・それは僕たちの事かな?)

(ひーちゃん酷い!!)

(俺達は幽霊なんかじゃないぞ・・・まあ、死んじやいるが)
「そうだ、酷いぞカズ君、人を幽霊扱いするんじゃない」

べ、別に幽霊扱いなんかしてないんだからね!!

(誤魔化した・・・)

(誤魔化したね・・・)
(ちょっと待て、おかしいぞ)

「何がだね?」「何がだね?」

なにが?

(なに?)

(へ?)

(俺たちの会話はカズの考える事が聞こえるからできてるだろ?)
「そうだな」

そう・・・だつたね・・・

(うん)

(それで?)

(そうすると・・・おかしい所があるんだ・・・
さつきから・・・何度も・・・)

「何所だ?」

ど・・・ど・・・つ!?

(・・・・・!?)

(・・・・・!?)

(そう、声に出して会話している奴がいるんだよ・・・)

「ふむ、それは私の事だな」

「『最強』さん!? 人の考えることを軽く読まないでください!!」

!」

「それより誰だ?さつきからカズ君と話してるのは

「友達ですよ」

「そうか、友達か」

「何所にいる?」

「死後の・・・世界?でいいのかな?」

「そうか、うむ、そういう事もあるのだな。」

「むうむ、私は光賀 光、カズ君のクラスメイトだ。
職業は学生兼二代目勇者、好きな物はラムステーキ、
嫌いな物、というか事は割り箸がうまく割れないこと、
得意技は『スーパー・ノヴ』だ。

宜しく頼む

(あ、はい、こちらこそ宜しくお願ひします。

僕は××××です、ヒフミと同じ施設にいました。

職業は冥界組合事務部長です。

好きな物はトリュフのホイル焼きで、
嫌いな物はピータンです。

あ、えと、得意技は『昇 拳』です)

(わたしは だよ～～ようしき～～。
ひーちゃんと同じ施設にいたよ～～。

仕事は冥界組合会長の秘書でエンマさんのお手伝いをすること。
好きな物はとんかつパフェとキャビアのクラッカーのせで、
嫌いな物はハラペーニョソース、
得意技は『骨はずし』です)

(俺は だ。

カズとは同じ施設だった。

今は冥界組合営業部長兼宴会部長をしている。

好きな物はフォアグラ丼、

嫌いな物は・・・特に無いな。

得意技は『ライダー ック』だな)

「それでだな、死後の世界?であつてるのか?

どんな感じなんだ?本当に死んだのか?

カズ君は昔どんな感じだつたんだ?」

(意外とここには快適なんですよ、暑くないし、テレビとか色々ある
し)

(死んだのはホントだよ～～私は森で熊さんに襲われて死んだんだ
よ～～)

(カズは昔『冥探偵』と仲良かつたな、知ってるか?)

あのドラマ『冥探偵～困難な事件簿～』ってヤツ、

アレ実は実際にあつた事件だったんだよ)

「アレか!! アレよく見るぞ!! 大ファンだ!!

そうだったのか!! ビックリした!! でも『呪いの館密室殺人事
件』

の『犯人は本当の悪靈だ』ってのは流石に嘘だろ?」

(あ、それホント)

(うん、ひーちゃん取り憑かれて天上歩いてたりしてたよ～～)
(まあそれは事件後のオチみたいな感じでまとめられてたけどな)

「いやー、カズ君、大変な思いをしてたんだな」

「・・・・・・・・・

「ん? どうしたんだ? カズ君」

「あ、いや・・・別に・・・うん」

いや、ツッコマーダリが多すぎる!!

『みんな』の得意技が必殺技のは、知つてたからいいけど・・・

『みんな』が何かあつたときいつも必殺技をのつけから連発してた
のは

見てたからいいけど・・・いや、ダメだけど!!

『最強』さんの得意技はダメだ!!

フーザとその兄貴が使つたヤツか!?

それとも、セフィースのヤツか!?

どっちにしる星が壊れるヤツだ!!

しかも『みんな』の職業なんなの！？

冥界組合つて何！？しかも結構偉いつぱいし！？

『最強』さん、一代目勇者つて何！？

しかも『みんな』の好きな物が世界三大珍味つてどんぶりとーー？

「ああそういう、私たちく召喚へされたんだ」

「ああそうですか・・・ってんなわけないでしょーー..
いや、そういうじゃないかなーー?って思つてたけどーー..
勇者つてなんですか！？」

「勇気ある者の事だな」

「ですよねー」

「やうだな」

「つて違つーーなんで勇者やつてるのかつーー」とですよーー..

「私は勇氣があるからな」

「そうですねーーそうでしたねーー確かにあなたの勇氣は凄いです
！」

「だがそれも違つーーなぜ職業が勇者なのかつてことですかーー..」

「く勇者召喚くでこっちに来て勇者になつたからな」

「はつ」

「なぜ鼻で笑つた！？」

「あ、いや、自分もつこにここまで来たかあ（チクシヨウ）」、と思
いましてね

「チクシヨウだと？」

「いや畜生です」

「変わりがないぞ！？」

「そうですね、どつこにしつの回じー」とです

「同じことつて酷いなカズ君！！」

・・・カズ君、なんか目が覚めてから変だぞ？」

「へ？」

「いつもと雰囲気が違つ」

「ん〜〜〜・・・ああ、そつか」

『大人しい男子高校生』の『仮面』を被る。

「これで、どうです？」

「・・・いつものカズ君だな・・・どうこう」とだ?

「説明するのが難しいですね・・・」

「じゃあ、説明はいいからもう一度見せてくれ」

「はい」

『大人しい男子高校生』の『仮面』外す。

「さつきのカズ君・・・いや、これが元のカズ君か」

「そういう事です」

「ふむ、面白いな、他は出来るか?」

「出来ますよ」

『テンション高めの男子高校生』の『仮面』を被る。

「どうスか？」

「ほう、話しかけまで変わらぬか」

「ハハッ！ そんなんスよ——、イヤお前は何モンだつてね」

ウザい感じがしないでもない。

『テンション高めの男子高校生』の『仮面』外し、
『最強』の『仮面』を被る。

「ふむ、それは私か？」

「まあ、見た目はそのままだし本物の十分の一の力しか出ないがな
要するに、雰囲気と話しかけ、それに少しの力を真似るという事だ
な」

「うむ、そつい……うう……と……だ……な……
ガハッ」

「どうした！？ カズ君……」

急いで『最強』の『仮面』を外す。

「ふつ……うつ……ふう……はあ……はあ……

「大丈夫か？」

「……だい……じょ「ふ……です……はあ……

「何があつたんだ？」

「調子に乗りすぎました」

「うん？」

「あなたの力が強すぎるという事ですよ『最強』さん、十分の一の力でも、体が耐えられなかつたという事です。本当にあなたは人間ですか？」

「失礼な！私は人間歴何年だと思つ？」

「五百二十年？」

「そうだ！！五百二十年だ！！

違う！！十七年だ！！十七年間も人間として生きてきたんだ！！！それなのに人間ではないと言われるのは心外だ！！！」

「ク プトン星人かも」

「スーーマンか私は！！」

「それを言ひならスーザンとスーーワーマンの違いが分からぬんふう、スーザンとスーーワーマンの違いが分からぬん

て、期待外れですよ『最強』さん・・・・・・・まつたく・・・・・

「何故そこまで呆れられる！？」

「今私に悪いところあつたか！？私が悪いのか！？」

「そうですよ」

「肯定した！？」

「あなたは超人じやない、もう超人の域すら超えてるよ・・・つたくつ！！」

「カズ君、ただ口が悪いキャラになつてしるよ！..」

「ああ？なんだつて？もういつぺん言つてみな」

「ガラが悪いキャラになつた！」

「戻つてくれ！！私が悪かつたから、昔のカズ君に戻つてくれ！！」

「そう簡単に俺様のキャラが戻るとでも思つのか！！！」

「愚民めが！！フハハハハハア！！」

「良く分からぬキャラになつた！？」

「何だこの安定感の無さは！？」

「あ～～～・・・飽きた、もうこいや、ふざけるのはいいまでです

「飽きただと！？」

「あ、キャラが定まらないのは元からです」

「まだキャラが定まつていなかつたのか！？」

「キャラが定まらないキャラが居てもいいかと・・・」

「良くない！！疲れる！！誰がとは言わないが疲れる！！」

「今ここに、勇者。魔王。村人。商人。魔物。冒險者。

「吟遊詩人。」

魔法使い。僧侶。古代人。賢者。その他諸々が生まれる

「！」

「選択肢が多くすぎる！！しかも最後面倒になつてまとめただろう！？」

「そしてどれも選ばない！！」

「選べよ！！」

「だが断りもしない！！が、進んで選びもしない！！選んでもすぐに変える！！それが自分」

「ただの優柔不断だ！！」

「そう！！！その通り！！！」

「自信満々だ！！それはダメだろ？！少なくとも胸張つて言いつ事

「じゃない！！」

「そう・・・そのとおり・・・ううつ」

「うむ・・・なんか・・・すまなかつた・・・」

第22話『『最強』と『力』』（後書き）

『骨はずし』・・・時代劇・必殺仕置 人の必殺技

第23話『状況報告はサックリ』

「↙召喚へられて、しかもそれが↙勇者召喚へだつていう事は分かりましたが、
それ以外が全く分かりません」

「そうだな、全く説明していないしな」

「あの、穴と黒い腕みたいなのが↙勇者召喚へと関係あります?」

「うむ、まさにそれだな」

「アレに引き込まれて↙召喚へつてことでいいですか?」

「うむ、アレが出て来て私とタカ君はすぐに動いて、
アレを撃退しようとしてたんだがな、カズ君が引き込まれてしま
つて、
引き込まれたカズ君を、追つて穴に飛び込んだんだ」

「アレを撃退つて・・・どうやって?自分は動けすらしなかつたの
に」

「普通に殴つて」

うん、まあそんなこんなで『最強』さんと『最恐』君と自分はここ
に来たらしい。

自分が寝ている間に、騎士との対決や、お転婆なお姫様や、王様と
の謁見など、
所謂、王道的なイベントは全て網羅したらしい。
そして、今のところ元の世界に帰る方法は分からぬらしい。
分からない。知らないではない。『最強』さんだけなら帰れるよう

だ。

流石『最強』。だが、自分や『最恐』君がいると話は変わつてくる。

複数人で世界を渡るというのは危険が大きいらしい。

「あれ？ そういえば、『最恐』くんは？」

「タカ君か、タカ君は出て行つた」

「何所に？」

「北」

「そんな漠然とした答えが返つてくるとは思つてませんでした」

「ああ、いや、北の辺境に村があつて、そのそばの森に『賢者』がいるらしい、

その『賢者』が帰り方についてなにか知つているのではないかという事で、

飛び出していつた

「ふ～～～ん」

「うむ、それで今私たちは人質としてここに居る」

「はあっ！？ どういうこと！？」

「いや、表向きは人質じゃないがな、まず私は人質にするには強すぎるし」

「そうですね、拘束するのは絶対に無理ですね」

「ここでカズ君の登場、カズ君が人質にされてしまったという事だよ」

「ああ～～死んでる間にそんな事になつてたのか～～」

「うむ、カズ君が人質にされてしまつては、私もここで勇者として働かないといけないのだよ」

「働くんですか・・・ 何するんです？ そもそも勇者の仕事ってなんですか？」

「それが、何も無いのだよ、することが

「魔王退治は？」

「魔王は孫が大好きなおじいちゃんだった」

「それは・・・倒しちゃつたらダメですね」

「だが、その好々爺をこの王は倒せと言つてくるのだ」

「どうするんです？」

「今は一応訓練中という事になつてゐるが、いつか倒せと言つてくれるだらう。

よつて、田標はそれまでにここから脱出する。とこつ事になる

「もし帰り方がそれまでに見つからなかつたらどうするんです？」

「その時は、その時を」

やつ言つて『最強』さんは笑つた。

「つむ、そういう事で状況報告は終わりだ
「ここまで長かった……本当に……」

「それはまあ……すまなかつた……」

「何故ここまで長くなってしまったのか？それを知る者はもう、い
ない」

「いや……それはどう反応したらいいんだ？」

「総スルーで」

「何故言った？」

「ノリで」

「ノリか、ノリなら仕方ないな」

「仕方ありませんね」

「うむ……忘れていた……」

「何おうー？」

「字がちょっと違つぞ」

「何をー？」

「そうだ……王様に謁見しなければならないのだった」

「孫が大好きなおじいちゃんの国に攻め込もうとしてる王様に？」

「そうだ」

「イヤかもしけないが、仕方ないのだ」

「挨拶して、んじゃ！……じゃダメ？」

「ダメだな」

「ワタシ、コトバ、ワカリマセーンでは？」

「まあ多分それでいい」

「いいんだ！？あ！…そう言えば言葉は？」

「全然違うな、英語、フランス語、中国語、日本語とか、私たちの
世界の

言葉全てを全部混ぜたような言葉だった。

意思の疎通は重要なだからな、私とタカ君はすぐにマスターした
「すぐにつてどれぐらい？」

「十分」

「早っ！！無理っす、それは無理っす。自分、英語とフランス語とドイツ語と

韓国語と中国語と日本語で精一杯です！！

「ソレはもう、文字通り命懸けでしたから！！」

「胸張って言わないでくれ」「…」をか悲しくなってぐる

• • • •

「元本難」へど、ひどく薄い。イジリ物で、少しも

「死んでるじゃないか」

「ええまあ」

「その時が五回」

「マフィアに殺される小学五年生ってどうなんだ」

「まあ、そんなことがあつても…………嘘くないですわ、うん、

「自己完結した！？」

「とまあ、言葉は命が懸つてたから憶えた様なものなので、

普通に勉強しても、覚えられる『気がしません』

「はあ、ダメだなガス君は、ガス君はダメだな！」

「そんなカズ君のために私がとつておきの魔法をかけてあげよう」

「解説」
問題理解と解説の実践

「そ、うだな・・・よしー！光へよー！」

「田が！田があああああー！」

「すまない・・・強すぎた」

第24話『王様への謁見』

衛兵っぽい人が叫ぶ。

「王様！…勇者様がお出でになられました…！」

「つむ、通せ」

無駄に豪奢な扉が開かれる。

その先には真っ赤な絨毯、ものすごくカフカしそうだ。更にその先には、これまた豪華な玉座、そこに座る人物がその玉座の主であり、この国の主である王。
アビヤヌス・ソロモン・サトー。

サトーって…！

と思つたこともあつたが、『最強』さんが二代目勇者であったことから、

初代勇者がいることは、分かつていた。
流石に勇者をしてたというサトーさんが、

王様になつていたのには驚いた。

この王は、その初代勇者サトー・イチローの息子らしい。
ちなみにソロモンがサトーさんが付けた名前らしい、
サトーさん…遊んでんな。

「王様、勇者光賀 光参上いたしました」

流石だな『最強』さん、様になつてゐる。自分は、最強さんのもねをして頭を下げてゐる状態で卑く見えないが。

多分、様になつてゐる。

「顔を上げよ

「はつ

顔を上げる『最強』さん。自分はまだ顔を上げない。

「此度は何故此処に來た?」

「はい、眠つっていたもう一人の『召喚者』が田覓めましたゆえ、ここに來たしだいです」

「ふむ、召喚者とな」

「はい、こちらに面ますのは二ノシタ・ヒツジ、私と回じ学校に通つていた者です」

「そうか、その者、顔を上げよ」

まだ顔は上げない。

『最強』さんと打ち合わせをして、自分はまだ『かりの言葉』が分か
つていないと、

ところ[設定]にしているからだ。

「申し訳」いやいません王様、この者はまだ『かりの言葉』が分からな
いのです」

「やうか、なら勇者殿が伝えてくれ

「はい」

『最強』さんがこいつそり耳打ちしてくれる。

「カズ君、『うちの言葉は分かるか?』

「凄いですね、魔法」

「顔を上げて、適当な言葉を詰つてくれ

「はい」

顔を上げる。

「ドウモー、ヒゲダー、モサモサシテル、
アツ、ワタシ、コトバ、ワカリマセーン」

棒読みである。

「えー、じぢらの者は、『初めまして、これから宜しくお願いたし
ます。

言葉はまだ解りませんが、おこおい勉強します。お髭が立派ですね
と申しております」

『最強』さん、凄く良く訳したな。

「せうか、この髭の良さが分かるか、
言葉が分からるのは大変だろうが、早く馴染んでくれ、
魔王との戦いもある故な」

王様、髭が誉められて若干上機嫌だな。
別に自分は誉めてないが。

「その」とですが王様・・・

『最強』さんが出しゃむ。

「この者は、魔王との戦いには、参加することはできません
「何だと?」

一気に王様の顔が険しいものになる。

「この者は、私と同様、戦いと無縁の国に生まれた故、戦い方を知
りません」

「だが、おぬしともう一人、カゲヤマは騎士隊長を倒すほど強かつ
たではないか」

「それは、ひとえに私とカゲヤマが戦いなれていただけだからです
「おぬしたちは特別、と言いたいのか?」

「はい、ですから、この者は戦いに加えないでほしいのです

ナイス!『最強』さん!!!

自分は戦いなんかまつぱらだ！！
人が死ぬのはもうたくさんだ。

「戦えない、戦わないでは、ないのだな」

「はい」

「ふん、いいだろう」

「ありがとうございます」

「代わりに、この城で働いてもらうがな」

え？ 今なんて？

「では、下がれ」

「失礼いたします」

豪奢な扉が閉まる。

「という事で頑張れ、カズ君」

「は？」

「仕事」

「死後ど？」

「仕事」

「なに？」

「仕事」

「ええええええええええええええええ！」？

「何を驚いてる？仕事だ仕事」

そんな！？異世界まで来て仕事するなんて！！
やつとバイトから解放されたと思ったのに！！

あ、でも、帰つたら結局バイトしないといけないのか。
あーーーっ！！バイト無断欠勤だ！！

クビだ！！もう完全にクビになってる！！

結構寝てたからな～～～、あの感じだと最低三日か？

「やついえば、『最強』さん自分、いつたいどれぐらい寝てたんです？」

「ああ、そうだな、一週間くらいか」

「くあああああーー！帰つたら、食費を切り詰めないといけないといけないか・

・・・

「家賃とかの心配をしてるのか？」

「そうです！－！自分のアパートボロくて、家賃が安いっていつても、あそこら辺では、つていう但し書きが付くんです！－！」

「高校生のバイトの収入では、結構いっぱいぱいなんです」「ああ、その辺なら心配する」とないで

「どうして？」

「いつもとあっちの時間の流れ方が違うからな」

「浦島太郎みたいに？」

「そうだな、ちょうど逆といつたところか」

「どううと？」

「いつも一ヶ月が向いつの一週間ぐらいだ」

「どうやって調べたんですか？」

「行ったり来たりを繰り返して、ちょっと計算」

「結構気軽に行ったり来たりするんですね···」

「そうだ、学校には？」

「ああ、もう連絡してある」

「学校はなんて？」

「『次元の穴はこちりでも確認した。異世界に通じていたのか。

たまにあることだから、頑張れ』」

「たまにあるんだ···」

「『無事に帰つてきたら、ちゃんと単位はやるから、時間は気にするな、あ、そっちで手に入れた珍しい物は学校で買い取るから、冒険者なり勇者なり、好きにやるといい』···だと

「···はは」

「流石、ウチの高校、異常だ。」

第25話『のんびり駄車の旅～ゼイスちゃんは空氣～』（前書き）

カオル視点に戻ります。
説明回です。

第25話『のんびり馬車の旅～ゼイスやまねの旅～』

「カオルー、準備できたー？」

「うん」

「では、行くとするかの」

今まで色々あつたけど、出発だ。

僕たちは、勇者で王様だったサトーさんの日記が残っている、図書館があるという、王都に行くために村を出た。この前のお買い物は、そのための準備という事だ。

「お～、馬車か～、初めて見たよ～」

「じゃあ、乗るのも初めてね」

「うん・・・あ、馬車って揺れが激しかったりする？」

「そんなことないわよ、この馬車、高かつたし」

「どれくらい？」

「金貨一枚ぐらい（約一百万円）」

「うわー、高いなー、せっぱぱゼイヌさんお金持ちなんだー」「ほほほほ、使わないだけじゃよ」

馬車に乗り込む。

馬車は、二頭引きで、

大きさは軽のワゴン車ぐらいの大きさ、屋根に荷物を積めるようになつてゐる。

外装は、飾り等は殆どなく、極めて質素なものだ。

内装は、外装に比べお金がかかっているらしく、

外と中の差に驚く人が居るかもしない。

椅子は、扉をはさんで、対面するようにして備え付けられている。その椅子も、長旅でも疲れないように、少し硬めの椅子だ。

僕と、フェリシアが中に乗り込み、ゼイスさんは御者台に乗る。

「なんか、思つてたのと違うかな

「どう?」

「なんかもつと、赤い絨毯みたいなのが椅子とか床とか壁とかにあ
る感じ」

「ははつ、いくらなんでもそれは無いわよ

「そうなの?」

「悪趣味じやない、まあ、他の金持ちはどうか知らないけど

「そうだよね

きっと、ゼイスさんが特別なんだろう。

昔は、普通に働いてたと言つていたし、金銭感覚が普通の人には近いのかもしない。

ガタガタと、馬車が走る時速30キロぐらいだらうか。

「意外と、揺れないんだね」
「そりゃあ、さす・・・さすなんとかが入つてるからよ」
「サスペンション?」
「ううそれーサスペンションが入つてるからよーーー。」
「へー」

馬車にサスペンションが入つてるのは意外だ。

「サスペンションも勇者サトーが伝えたものね」
「サトーさんは一体何をしたかったんだらう?」

「そういえば、あんまり武勇伝みたいなのは残つてないわね」「そうなの？」

「ドラゴンを倒したとか、そういうのはあるんだけど、意外と少ないよね」

「あるじゃん、ドラゴンを倒したのが」

「うん、それでも少ないのよ、

ましてや何百年も続いてきた戦争を終わらした勇者なのよ？ もつとあつてもいいはずなのよ」

「そんなに少ないんだ？ ゼイスさんは？」

「それが、勇者サトーよりも多いのよ」

「158年も生きてるんだつたら当たり前じゃないの？」

「それも無いのよ、ゼイスさんは勇者サトーに会つまで、ずっと古代語の研究をしていたらしくの」

「古代語ってことは、日本語の研究をしてた？」

「そうね」

「じゃあ、サトーさんに会つて、古代語、日本語を話す生きた資料が田の前に現れたから、もう研究する必要はなこと？」

「そういう事になるわね」

「それが、58歳の時」

「そして勇者サトーと共に旅をした」

「それだったらおかしいね」

「おかしいでしょ？」

「王都に着いたら、そういうのを調べるのも面白くかもしないね」

「その前に、あることがあるわ」

「なに？」

「買い物でしょ？ おいしいもの食べて、カオルに可愛い服を着せて、面白い物を買つの、ついでにカオルが学校に編入するための手続き」

「おいしいものは食べたいけど、可愛い服はやめて……」

「学校に編入するための手続きが何でついでなの……」

や

「なんですよー！服は重要じゃないー！」

「この前買った服だつて着てくれないしー！」

「イヤだよー！あんなのー！」

「そんなー！カオルのために買ったのに・・・・・・

そうね・・・・・・カオルは男の子だもんね」

「そうだよ

「だつたら、カオルが女の子になればいいだけの話じゃないー！」

「なんでー？」

「男の子だから着れないんでしょ？」

「そう・・・・・だけど・・・そういう問題じゃないよー！」

「無かつた事にしたくても、顔が真っ赤だぞ～」「はうーーー！」

僕達が行こうとしている王都の学校は、
国内トップクラスの学校らしい、そんな所に僕が入れるのー？
と不安になつたけど、そこはゼイイスさんの弟子という事で、
簡単に入れるらしい。

王都には、国的主要機関がいくつもあり、
王城や、議会などもあるらしい。

この国には、王都と言うだけあって、王様がいるらしい。

初代王様であるサトーさんの息子さんだそうだ。

王国で王様が居ても、王政ではないそうだ。

そのために、議会があり、その議会で國の方針を決めるらしい。
だが、まったくもつて王様に権力が無い訳ではない、
いくらか王様も権力を持つてゐるそうだ。

権力を持つてゐるのは、裁判所、日本の警察機関にあたる警備隊、

議会、王、の四つ、三権分立ならぬ四権分立だ。

たぶん僕の生活には関わってこないだろうが、これも常識、小学生でも知っている知識だと、ゼイスさんが教えてくれた。

「そろそろお昼ね、ご飯にしようか

「うん、お腹すいた」

「ゼイスさん！…」ご飯にしよう…

「ほお、もうそんな時間かね？」

馬車が止まる。

第26話『のんびり馬車の旅～魔法コソロ～』

さて、王都への旅が始まって、初めての食事だ。王都へは、三つの村を中継して行くことになる。始めの村までは、この馬車で四日程かるらしい。何もなければ、といつ葉葉が冠に着ぐが。

何はともあれ、食事だ。

きょうの食事当番は僕だ。

前々からしてみよつと思つていたことをじよつ。

「力オル、何してるの？薪は？」

「魔法があるんだし、どうせなら魔法でできないかなー？つて思つてね」

「ほう、魔法を使って料理か」

「うそ」

火に関する「魔法陣」を思い浮かべる。

魔法に関してだが、僕は魔力が少ないことが分かつた。

魔法の練習をしていく「詠唱魔法」四発撃つだけで、

倒れてしまったからだ。

それにより、直接現象を起こす「詠唱魔法」が僕は余り使えないことになる。

しかし、「詠唱魔法」で頭の中の「魔法陣」を「展開」することでの魔力の消費を少なく魔法を使える。

「展開」の魔法は「詠唱魔法」ではあるが、頭の中のイメージを光にして表すだけなので、魔力の消費がとても少ないのだ。これは、僕だけに当てはまる事ではなく、魔力が少ない人全般に対する救いになる。

魔力が少ない人は、それだけでいじめを受けたり、仕事の幅が少なくなったりするそうだ。

「<展開>」

「カオル、何を考えてたの？」

「へ？」

「ほう、<魔法陣>とカオルの魔力に関する」と、カオルが発見した「展開」の魔法の使い方についてか

「うわ！？全部出てきた！？」

「へえ～、カオル、いろいろ考えてたのね」

「見ないで～、恥ずかしいから見ないで～」

「ほつほつほつ、まあこういう事もあるじゃん！」

「うう～」

氣を取り直して、火に關する「魔法陣」を思い浮かべる。

その「魔法陣」に「弱火」、「中火」、「強火」、「継続」、「切

替」>

などの文字を追加していく、その時に火のイメージを文字に乗せる。
そして・・・

「＜展開＞」

「今度はちゃんと出来たみたいね」

「ふう、よかつた」

「ほう、見せてご覧なさいカオル」

「どうです？」

ゼイスさんに出来た「魔法陣」を見せる。

「ほう、火の「魔法陣」に色々文字を追加したのか

「はい、多分それでコンロ・・・日本のつていうか、元の世界の料理道具で、

火の大きさを調整出来る道具があるんですけど、
ソレみたいなことができると思います」

「いいのう、カオルの世界には便利なものがあるんじゃのう、羨ましいわい」

「まあ、便利になつた分、人も怠けますけどね」

「便利になりすぎるのもダメってことね」

「そうだね」

「では、起動させてみなさい」

「はい・・・・・起動」

「ふむ？炎が少し浮いた位置に現れるのは何故じや？」

「この＜魔法陣＞を触ることで火力を調整できるようにしました。なので、＜魔法陣＞から直接炎が出ていると触れないからです」

「ほう、触つてみてもいいかの？」
「はい」

「魔法陣」が僕の声に応じて、＜起動＞する。

＜魔法陣＞より少し浮いた位置に炎が現れる。

小さな炎、いわゆる＜弱火＞だ。

ゼイスさんが、＜魔法陣＞を触る。

すると炎が＜弱火＞から＜中火＞に変わる。

「もう一度触つてみてください」

「分かつた」

今度は、〈中火〉から〈強火〉変わる。

「もう一度触ると、また〈弱火〉になります。

そして、〈消火〉と唱えると、火が消えます。

また点けたいときは〈着火〉と唱えればつきます」

「いいわね、コレ凄いじゃないカオル！！」

「へへえ～」

誉められるのは、純粋に嬉しい。

ちなみに、普通〈魔法陣魔法〉は発動し、現象が起きたら〈魔法陣〉は消え、

もう一度使えないのだが、〈継続〉や〈維持〉などの文字を〈魔法陣〉に組み込むことで、〈魔法陣〉が消えずにもう一度使えることができる。

これもまた、僕が発見したことだ。

このような事は勇者だったサトーさんが見つけててもいいような事だが、

サトーさんは勇者だけあって魔力も多く、主に使るのは〈詠唱魔法〉だったそうだ。

きっと、魔法をバンバン撃つてカッコよく戦っていたんだろう。

「偉い子のカオルには、」」褒美にぎゅーっとしてあげましょ、ほ
ら、おいで！」

「行かないよ！！」

「よし、ならばわしが行こう」

「イヤ……ゼイスさんは来ないで……変態……」

「な……変態！？・・・い、いや、ちょっとした「冗談じやう」

「冗談でも、変態は変態です……」

「ゼイスさん、フエリシアも年頃の女の子なんだよ、そういうのを
ちゃんと考えて？」

「昔はフエリシアも素直に受け入れてくれたんだがのう」

「子供は成長するものです」

「そんなこと言つても、」」の中で一番ちつちついのはカオルだけだ
ね」

「ゼイスさん……フエリシアが僕に酷いことを言つたよ……

「僕が一番、気にしていることを言つんだ……」

「フエリシアよ、人にはそれぞれ個性とこつものがあつての……

「何ですか？変態」

「カオルよ……フエリシアがわしに酷いことを言つんじゃ……

助けてくれ……このままではわし、立ち直れないかもしれん……」

「ゼイスさん……」

「カオル……」

ゼイスさんが腕を広げる。

ソレが意味することは・・・すなわち、熱い抱擁。

「いや、ちょっと・・・」めんなさい

「カオル！－！さあ－－！」

「そういわれても・・・なんか、イヤです」

ゼイスさんの心が折れる音がした。

第27話『魔物』（前書き）

遅くなつてすみません。

この中で書かれている馬車の御者の仕方は、
調べた物ではないので正しくありませんのであしからず。

第27話『魔物』

お昼ご飯を食べた僕たちは、また馬車に乗り込んだ。

今度は、フーリシアと僕が御者台に、ゼイスさんは中に座る。御者台上にわざわざ一人も乗ったのは、僕が御者の方法を覚えるためでもある。

「いい？ カオル、」つやつやして馬に指示を出すの

繩をペシッ！ とする。

すると馬が、歩き出した。

「これで歩け」

ピッペシッ！ とある。

「これで走れ」

לְשׁוֹן־בָּנָי־לְשׁוֹן־בָּנָי

「もっと走れ」

۲۰۰

「もっともっと走れ、それで・・・」「と、とりあえずーー！叩いたら走ってくれるんだねーー！」
そ、そうね

「めんね、お馬さんこいつぱい呑いて・・・届かない」と思つたが、一応念じておいた。

「他は？」

「この繩を後ろに曳いつきり引っ張ると、止まれ。軽く引っ張ると、速度を落とせ。右に引っ張ると、右に曲がれ。

左に引っ張ると、左に曲がる

「うん、覚えた、簡単だね」

「やってみて」

「うん」

走っているお馬さん」、速度を落としたの指示を出すため、繩を軽く引っ張る。

すると、お馬さんがその指示に従ってくれる。

「おー、ありがとうー。お馬さん」

「何言つてこの? カオル」

「お礼」

「なんで?」

「初めての僕の指示に従ってくれたから」

「そりや、しつかり訓練された馬だからね、ちなみに名前は、左がイギーで右がノラ、どうもオスよ」

「そりなんだ・・・直しくお願いします」

任せておけばばかりに、お馬さんたちが嘶いた。

「良かつたわね、認めてくれたみたいよ」

「ほんと?・じゃあ改めて、僕の名前は櫻井 薫宜しくお願ひします」

「馬にまで自己紹介するのね、カオル、でもたかが馬よ？」
「馬つて賢いんだよ？ねーお馬さん？」

うんうんと首を振るお馬さんたち。

「ほりね？」

「本当ね、知らなかつたわ」

御者のしかたは憶えたので、

僕に教えるために御者台に乗っていたフェリシアは、馬車の中に入つた。

だから僕は今一人だ。

御者を覚えたと言つても、お馬さんたちは頭がいいから道が悪い所は避けてくれるし、

急ぐ旅でもないので、走らす必要もない。

景色は見渡す限りの草原、

初めて見たときは感動したけど、ずっと見ていたら慣れもする。
お毎^{まい}一^{いっ}飯を食べたのは一時間ぐらい前だけど、
ほとんど何もしていないので、小腹も空かない。

僕がこないだ武器屋で買った物も、そう手入れするような物でもない。

魔法だつて、僕が使うく魔法陣^{マジック}は全て覚えたし、
こんなところで魔法を使う必要もない。

ぶっちゃけて言つと今僕は・・・

「暇だよ・・・お馬さん」

お馬さんに語りかけてみた。

お馬さんは、それはどうしようもねえよ、と言いたやうに首を振つた。

このお馬さんたちは妙に人間臭い。

「昔は人間だつたとか・・・ないよね？」

お馬さんたちがビクッとした氣がするけど・・・まさかね・・・

「ひま～ ひ～まひ～ま ひつまひま～」

と歌つてみたけど、悲しくなつたからやめた。

僕が暇を持て余してこると、突然お馬さんたちが止まつた。

「あれ～?どうしたの～?」

お馬さんたちは前を見て、それから僕を見た。

「向こうに何があるの？」

向こうの方に点々と何かがあるのは分かるけど、遠くて良く分から
ない。

「フヨリシアー、ゼイスさん」

馬車の中にいるフヨリシアとゼイスさんに呼びかける。

「なんじゃ？」
「どうしたの？カオル」
「お馬さんたちが止まつてね、向こうになんかあるみたいなんだよ」
「ほう、フヨリシア」
「うん、これは・・・魔物の臭いね」

こんなに遠くからでも分かるのは、フヨリシアが犬狼族だからだ。
犬狼族はオオカミや犬の魔獸と人間の間に産まれた者の子孫だ。
代を経る毎に魔獸から受け継いだ力は薄れて行っていて、

フェリシアも魔獸の力など殆どないとは言えども、普通の人よりも魔力や身体能力が高い、それは努力や才能だけではなく、

魔獸の血を引いているからだ。

「魔物！？うわわわ、どうしよう」

魔物と魔獸は大きく異なる。

魔獸には大きな魔力、高い知性、飛び抜けた身体能力があり、そして何より人語を解す。性格は温厚だが、それは礼を持って接した場合だ。

人を襲う事は基本的に無い、無礼な者や、己を殺そうとして来た者、そして己を愛するものを傷つけた者には容赦しない。

魔物は凶暴で、人、魔族、関係なく襲う。

だが百年以上前、サトーさんが人と魔族の長年続いてきた戦争を止めるまでは、

人間の間では、魔族が魔物を操っているなどと言われていたそうだ。その関係で昔気質な人間の間では、魔族を嫌う、魔族を差別する様な人が居るそうだ。

これがこの大陸、人間種、獣人種、妖精種が住んでいる東の大陸での常識だそうだ。

「フェリシア、行きなさい」
「分かりましたゼイスさん」

「行くつてどこに?」「

「魔物を倒しにね、ちょっと待つててね」

「え?・・・ちょっと...」

そう言つてフェリシアは僕が止める間もなく走つて行つてしまつた。

ここから見える（と言つても点のようになしか見えないが）魔物の数は約四十、それが固まつている。

その塊に向かっていく一つの点、フェリシアだ。

フェリシアはもの凄いスピードで塊に迫つて行く。

元の世界でのスピードを出せる人間は少ないだろう、

光賀さんと『怪足特急』と呼ばれている人しか思い浮かばない。

「速い」

「そうじゅう、アレは獣人の脚力と身体強化の魔法を使っておる

やつぱり魔法を使つてゐるのか、どうで速い訳だ。

やつぱり光賀さんは凄いんだ。

とも思つし、魔法つてすごいとも思ひ。

だけど魔法は便利すぎる。

僕が見てきた限り、この世界の技術レベルはファンタジーでよく読むような

中世ほど、それに魔法という技術が加わり一部発展しているという状況。

冷蔵庫はあるのに冷凍庫は無い、上水道はあるのに下水道は無い、何故そんな中途半端な発展具合なのかといふと、

食品を冷やしたら長持ちするのは分かるが、

それがなぜ長持ちしているのかが分かつていない、

下水がたまつたらく浄化で綺麗にしたら良い、といふ具合だ。何故そんな事になったのかといふと、やはり魔法があるからだ。おばあちゃんの知恵袋的に魔法が教えられているからだ。

『ずっと汚れたままいると病気になります。

なので、定期的に「浄化」をしましょ』みたいに教えられる。

そこには『汚れたままでいると病気になる』ところはあるが、

『病気とは何なのか?』が無い。

簡単に言つと・・・

元の世界・・・病気になつた 何の病気か調べよう 病気の治療
この世界・・・病気になつた 魔法で病気の治療
みたいな感じだ。

要するに何故?どうして?が無いのだ。

『魔法で治るからそれでいい』のだ。

だが、このままじゃダメだと思つ、毒や菌(このせかいでは悪い精

靈に例えられている（

の概念はあるものの、細胞などの知識が無い、ゆえにここの人たち
が使う魔法では

まだ治せないものが沢山ある、ガンや腫瘍などがいい例だ。
この世界の魔法は日本語である古代語と魔力、そして個人のイメー
ジから成り立っている。

このイメージ日本人なら簡単にできるだろう。
しかし、この世界ではイメージの元となる情報そのものが少ない
だ。

体の中をイメージしたいなら、体の中を見たことが無ければならな
い。
その上、病気についての知識が無いので打つ手がない。

再びフェリシアを見る。

フェリシアは塊に突っ込む寸前だった。

第28話『対一角兔』（前書き）

初戦闘、ここまで長かった・・・
フェリシア視点です。

第28話『対一角兔』

私は駆ける。

前方にいる魔物の群れを殲滅するために。
カオルを守るために。

片手に一本ずつある短剣を握りしめる。

長年使ってきた愛剣であり、ゼイスさんから貰った大切なプレゼント
トである。

久しぶりに手に持ったけど、まるで毎日使っている包丁のように手
になじむ、

この剣は私のために作られた物だといつのを改めて感じる。

「↙身体強化↙…↙知覚強化↙…」

一瞬もの凄い速さで景色が流れたように見えたけど、
すぐにいつもの様に見えるよくなつた。

「行くわよ、よく見てなさいカオル」

魔物をよく見る、まだぶつかるまでは少しある。

白や斑、黒の体毛、額から長く突き出た角、長い耳、口からはみ出る鋭い牙、

大きく発達した後ろ足、大きさは人間の子供ぐらいの大きさ、この地域でよく見る魔物、一角兎ね。

普通ならこのような群れを成すことは無いはずだけど・・・

「目が赤い・・・繁殖期?」

繁殖期になると、この魔物は子孫を残すために群れを作り、群れの中で交尾をし、そして群れで子育てをする。

そして繁殖期の間はより凶暴性が増す。

その期間は非常に短い、一週間か長くても十日位、

この魔物は非常に成長が早く、生まれてから三日ほどで成体になる。だが、数が増えすぎて問題になることは余りない、増えてもすぐに他の魔物や冒険者に狩られるから・・・この一角兔、魔物の中での強さは最底辺に位置する。

そのためよく冒険者の初心者の依頼の中でよく扱われることが多いそうだ。

頑張れば子供でも倒せるぐらいに弱い。

しかしやはり魔物は魔物、とても危険だ。

一番目を引くのがやはり角だろう、刺されるのを想像するのは容易い。

だが一角兔の一番注意すべきはその脚力だ。

角に注意して背後に回り込んだものの、

蹴り飛ばされ内臓をダメにする者が毎年必ずいる。

魔法を撃つために魔力を練ると同時に想像する。

「**風刃**！！」
「ピギヤアアアアア！」

魔物の群れの両側に風の刃が通り過ぎる。

魔法の余波の強い風で悲鳴と血飛沫が舞い上がる。

これで一角兔の戦力の三分の一は削れたと思う。

一角兔たちが大きな耳を立てこちらを見る。

私は、一角兔たちが戦闘態勢に入る前に斬りかかる。

右手での一閃、まず通りすがりに私の右側にいた一匹の喉を斬る。

返す右手で剣の柄を使い、正面にいた一匹の頭を殴り飛ばす。

犬狼族の力に「身体強化」の魔法が上乗せされた一撃だ、ほぼ即死だろう。

その飛んで行つた一角兔は他の一匹に激突する。

その時、運よく一角兔の角がぶつかつた一匹に刺さる。

「ピギヤアアアアアアアアアツ！？」

刺さつた角を抜こうと、上に乗るもう動かない仲間をじかそうとしてもがく、

だが、余計に深く抉り込むように刺さつて行く。

もうあの一匹は気にしなくていいと思う。

残り十匹になつたところで、左右同時に角で突き刺そつと飛び込んできた。

爆発的な脚力で飛んできたソレは、普通ならばまさに矢のような速度だろう、

だが「身体強化」、さらに「知覚強化」の魔法が掛かっている今の私には、

スライムの体当たりほどの速度でしかない。

「フッ」

軽く息を吐いて、後ろに少し下がり剣を振りかぶり構える。そして、田の前に飛んできた一匹に剣を振り下し仕留める。

「ギャウッ…」「ギャバッ…」

残り七八匹、今度は私の背後から飛び掛かってくるが、振り返りざまに剣を振る、一閃田で自慢の角を切り落とし、一閃目で首を刈る。

「ペヤウッ…！」

残り七八匹、同時攻撃もダメ、背後からの攻撃もダメと本能で分かったのだろうか、一斉に飛び掛かってきた。

そして、この時を私は待っていた。

カオルが見つけた「詠唱魔法」と「魔法陣魔法」を組み合わせて使う魔法。

頭の中に思い浮かべるのは、土に関する「魔法陣」

「↙展開↘ーー！」

私の周りの地面に幾つもの「魔法陣」が現れる。

それとほぼ同時に一角兎たちも魔法陣の上に乗る。

一角兎たちの身が一瞬すべり、魔法陣に集まる魔力に驚いたのだろう。

フフッ本当にすごいわね、カオルは。

「↙発動↘ーー！」

すると、地面が揺れ始める。

そして・・・

“パ、パ、パ、パ、パ、パ、パ、パ、パ、パ、”

今までそこには無かつた無数の柱が現れる。

ソレは土の「魔法陣魔法」によって出来た長大な柱であつた。
「魔法陣」に設定された範囲だけの地面、

そしてその下に広がる地層がそのまま、もの凄い勢いで上に突き出したのだ。

きっと、ここに地質学者が居たら狂喜乱舞する。

それはともかく、その地面に乗っていた一角兎たちも、
ものすごい勢いで突き出されたわけだ。

一角兎たちは慣性の法則に従つて上に飛んでいく、
やがてその速度はゼロになり、今度は下に落ち始める。
一角兎たちは自分たちがなぜ空を飛んでいるのか、
さつきの魔力の集まりはなんだつたのか、

そう思いながら体を地面に叩き付けられてその生涯を終えた。

「よし……解除……」

土の柱が突き出た時と同じような音を立てながら地面に戻る。

「いまのく魔法陣魔法く本当はあんなに強くないのになー」

やつぱりカオルが教えてくれた古代語をく魔法陣くに組み込んだからかな?

「うわ～ベトベトだ～気持ち悪～」

カオルがいるから、カツコイイ所を見せようと頑張りすぎてしまつた。

体中が血や泥で、ベタベタだ。

早く戻って、服を着替えて体を綺麗にしたい。

何よりもカオルの反応が見たい、カツコイイと思ってくれたらいいな。

第28話『対一角鬼』（後書き）

初めて戦闘描写をしたのですが、とても難しいです。
もっと派手に、格好よく書けるようになりたいです。
そもそも文系ではない私には無理な話なのか・・・
「指南」、「指摘」、駄目出し、「希望」、感想、お待ちしています。

第29話『アップダウン』（前書き）

ネガティブ回
カオル視点に戻ります。

フエリシアの戦闘は凄かつた。

女の子なのに、あんなに強いのは余り居ないと思ひ。

卷之三

「お待たせー カオルー、どうだった？ 私つカツコよかつた？」

「カオル、どうしたの？」

赤い、真つ赤だ。

そうだ、フヨリシアは戦闘をしてきたんだ、コレは・・・魔物の血だ。

一九〇

コレは、魔物の血なんだ。人も魔族も襲う魔物の血なんだ。

だ。

だから、フェリシアはイイコトをしたんだ。コレはイイコトなんだ。
大丈夫なんだ。大丈夫大丈夫、大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫大丈夫ダ
イ・・・・

「元気ないわね？見て！－今日の晩御飯は一角兎のシチューよ－－」
「あ、あう・・・」

フェリシアの手には力なくグッタリとしている角の生えた大きな兎が。
いや、兎だったモノが・・・

「ちょっと待つてね、着替えたらご飯の支度し始めるから
では、わしらはキャンプの準備をするかの」

分かつっていた、分かつてたはずだ。

ここは、剣と魔法のある世界、ドラゴンがいる世界、魔物がいる世界、
何故魔法という便利なモノがあるのに、技術がそこまで発展していない？

答えは簡単、発展するほどの暇が無いからだ。

たとえ新しい技術が出来たとしても、隅々まで伝わらないからだ。
なら何故、伝わらないのか？

百年前までは戦争、今は魔物が世界に蔓延っているからだ。

百年前の戦争で人が死んだ原因の一番は、戦争そのものではなく、
戦場に向かうまでに魔物に襲われるか、戦場に魔物が乗り込んでくるか、

戦争のために兵が出はからつた村が、魔物の大群に襲われるなどだ。そう、この世界で何よりも危険な物は魔物なのだ。

この世界は常に戦闘が絶えない。

人と魔族との戦闘はもう無いが、人と魔物、魔族と魔物の戦闘はまだ続いている。

比較的、今は平和らしい、平和と言つても常に死と隣り合わせの平和だ。

常に死と隣り合わせなのは、元の世界だつて同じだ。だけど、こっちの世界は、もつと、もつと簡単に人が、生き物が、死んでしまう世界なんだ。

それなのに、それなのに僕は、何を楽しそうに、他人事だと思って。

「・・・はい」

声に力が入らない、声だけじゃない、体中に力が入らない。
さつきの兎みたいに・・・

「ではカオルはこの棒を持つて立つてくれるかの？」
「はい・・・」

瞳孔が開き切つた赤い目、生き残るために必要であつただろうが今は力なく垂れた耳、

力強く素早く動くための手足だがそれも生氣を失い力なく伸びている。

そして、赤い一本の筋の入った首。

全く生きている気配が感じられない。死に切つてしまっている。どうしようもなく死んでしまっている。

「カオル、顔色が悪いの？・・・少し休んでおくかの？」

「・・・はい」

「馬車で休んでなさい、夕食になつたら呼ぶわい」

「・・・」

「あう～～～～気持ち悪～～～」

まだ日が血の赤い色でチカチカしてゐる気がする。フラフラとした足取りで馬車に向かう。

「ひょっと寝よつ

こうこう時は寝るに限る。
寝たら夢に出そうだけど。。。

「あへへへへへ

ガチャリと馬車の扉を開けて、馬車の椅子に倒れ込む。フカフカ、ではない堅めの椅子に置いてあるクッショーンに顔をうずめる。

「もふもふ

モフモフするとこくらか気が紛れる気がする。

そういうえば、無限に出来るプチプチや枝豆があつたなあ。
と思っているのは、ある程度回復したからか。

「もふもふもふもふ

意味も無くモフモフし続ける。

「何してんの？カオル」

「もふつ！？もふいふあもふもつ！？（フリシア居たのー？）」

「何言つてゐのか分からないわよ？」

「ていうかなんてカツコしてるのー！？」

「ん～？ハダカ？」

「聞かないでよ！？」

「裸よ！！」

「そんな胸張つて言わないで！？ああもう！…早く服着て！…」

「別にいいでしょ？どうせ…」

「同性じゃないからね！？ねえ、いつまで引つ張んのこのネタ！？」

「飽きた？」

「飽きたよ！？」

「飽きたなら仕方ないわね…・・・どうする？」

「『どうする？』じゃないよ！？僕はそこまで口常にネタは求めて

ないよ！…」

「いめんなさい…・・・」

「うんうん、さあ早く服を…・・・」

「頑張つてツツコむカオルが可愛くてつい」

「そんな理由だつたの！？いや、早く服着て！！

僕だつて男だよ！？可愛い女の子が裸で目の前に居たら・・・分

かるよね

一分かつたわ
・
・
・
」

「じゃあ早く服を・・・」

「来なさい！！カオル！」

「どうしてやがるー？」

「でも・・・初めてだから優しくシテね？」

「何をするのー!?」

「何つて、男と女の営みよ」

「カオル！？ ちょ、どうしたの！？ 言語機能が崩壊してる！…

冗談、冗談だから！！そんなことシないから！！でいうか先に言

つたのかオルだし！！

落ち着いて！！！・・・ほら、ひーひーふー

二二

「ひ」

「ひーひーひーひーひー・・・・ぶはうつーーえふつーおふつーー」

「落ち着いた?」

「酷いよ・・・フェリシア」

なんか色々あつて涙目だ。

涙をぬぐいながら言ひ。

「な、何でもないわよ！！」

「・・・？つていうか服！――もつこれでいいから着て――！」

僕の服を脱いで渡す。

「いいの？」
「いいよ？」
「私の裸はダメでカオルの裸はいいの？」
「いいの！！」
「つて言う事は・・・私からカオルを襲うのはアリ？」
「ナシ！――冗談だよね！？ソレ【冗談だよね！？】
・・・・・・・・・・・・
「黙らないで――！」
「・・・・・・ふふつ」
「何で笑うの！？もしかして僕襲われるの！？」

身の危険を感じた僕は、荷物から上着を取り出し羽織つて逃げるよ

う馬鹿を出た。

カオルが逃げちゃつた、あとちょっとだつたのに。
まあいいか、カオルが元気になつたから。

第29話『アップダウン』（後書き）

ネガティブは長く続かない。

どうか続けれない。文才の無い私には。

第30話『のんびり馬車の旅～夕食前と夕食中～』（前書き）

猛烈に話が進まない！！

第30話『のんびり馬車の旅～夕食前と夕食中～』

僕がフェリシアから逃げるよひに馬車から降りてみると、もうキャンプの準備は出来ていた。

馬車の屋根から出た布とそれを支える柱でできた田避け、もう夕方だからいらぬいけど。

どうやつて持つてきたのか煉瓦でできたしつかりとした釜。その上に乗った鍋からは良い匂いがする。

ああ、そういえば一角兎のシチューだったつけ・・・今は食べたくないなあ。

「おおカオルか、もう良いのか？」

「・・・うん、なんかもう、どうでも良くなつた」

「そつか」

「何であんなだつたかとか聞かないんですね？」

「あのタイミングでソレ以外に理由などないじやろ？」

「ああ、そうですね」

「本当に良いのか？馬車から悲鳴が聞こえておつたが？」

「まあアレは・・・」

「カオルー！待つてーーー！」

「まさか、馬車におつたフェリシアが・・・」

「そなんです・・・」

「カオルに襲われた」

「違います」

「やうなのがの？」

「どちらかと言つと襲われたよつな・・・」

「カオルー！－なんで逃げるの－？」

「あの状況で逃げない方がおかしいよ・・・

ああいうことは好きな人同士でするもんでしょう」

「私はカオルの事が好きだよ？」

「・・・あ、うん、ありがと」

「なんか反応がよそよそしい！－やめて私が悪かつたから！－！」

「あ、そういうばぜイスさん、えと、オロンでしたつけ？どんな街なんですか？」

「そうじや のう・・・」

「無視しないで！－」めんなさい本当に！」めんなさい！－！」

「もうしない？」

「もうしない」

「本当に？」

「本当に」

「今度したら、僕はフエリシアの事を軽蔑するよ？」
「にあつ！？しない絶対しない！－金輪際しない！－約束する！－」

「じゃあ許すん

「どうち－？」

「じめん、噛んじやつた。許す」

「良かつたあ～～～！」

そう言って抱きついて来た。

僕の胸に飛び込んできたフエリシアの頭をなでる。

「計画通り」そんな声が聞こえるが気にしない。

フエリシアの方が背が高いのに、僕の胸に顔をつづめるのはひんぱないのだろうか？

「でも軽蔑された眼で見られるのもいいかも……」と呟つのも聞こえない。

「カオルのこの無い胸もいいわね」・・・

「フェリシア、全部聞こえてる・・・」

「え、嘘!? カオルの「オイガたまらないとか、カオルの体が柔らかいとか全部!?!?」

「そんなこと思つてたの・・・?」

「はっ！? 言つちゃた!!」

なんか壮絶だつた。フェリシアが変態になつてしまつた。

初めて会つたときは、もつとキリッとしてたのに。どうしちやつたの?

これは僕のせい? 僕はこの旅の間、安全に過ごせるだろ? つか。

「前のフェリシアに戻つてよ」

「分かつたわ、カオルが言つならね」

「戻つた!?」

ええ〜〜〜? そんなすぐ戻るものなの?

「ご飯を食べながら、気になっていたことを聞く。
もちろん、僕のお皿の一角兎のお肉は除いている。

「やつやつ、どんな街なんですか？オロソンって」
「まあ、簡単に言つと温泉街じゃな」
「いつも通るけど、あの臭いには慣れないわね」

温泉街かあ～、楽しみだな。

こっちに来てお風呂には、毎日（ゼイスさんの家にあつたので）入
つていた。

だけど、温泉とお風呂は全然違う。

情緒とか効能とか色々あるけど、あの落ち着いた雰囲気が好きだ。

「料理は？料理はどんなのがありますか？」

「うん？料理が気になるのか？」

「そりやあもう、旅においしい」飯は付き物ですから」

「なにそれ？」

「あれ？ そういうの無いの？」

「旅は大変なものよ、疲れるし、長旅だと最後の方はおいしい物なんか食べれないし」

「うむ、勇者との旅で一番辛かったのは、戦闘でなく旅そのものじやつたな」

「わかつた？ カオル」

「うん」

「でも、私たちはそんな不自由はしないわよ

「え？ なんで？」

「まず、村から村、町から町までの距離がそこまで遠くないから。次に、馬車がいいし、食べ物も新鮮に保管できるしがら」

「一番町に一つも入ったね」

「いいじやないそんな事、最後にカオルが可愛いから」

「ソレ、入るんだ？」

「入るわ、むしろコレが一番。ね、ゼイスさん」

「そうじやのう、カオルを見てると、心が安らぐしの」

「ええへへ？ ・・・まあいいです、それで、オロンの『飯はおいしいんですか？』

「ええ、ちょっと変わってるけどね」

「変わってる？」

「魚を生で食べたり、なんかあんまり味の無い穀物を蒸す？茹でる？なんか調理したのが出でたりするの」

「それは、多分・・・」

「そうじや、カオルが思つておる通り、カオルの世界の料理、いや、

「ホン料理じやな」

「やつぱり? じやあ宿も畳、草のマットみたいのがあつたりする

?」

「いや、それはないの?」

「そう、なんですか?」

「落ち込まないでカオル、草のマットなんかより

綿がいっぱい入ったマットの方が気持ちいいわよ?」

「ただけど? ? そういうじゃないんだよ

「意味が分からないわよ?」

「むう、説明し辛い」

どう説明したらいいんだろう? 畠の良さって。

畠の香りとか、ウチの工場の休憩所とかが畠で、
そこで一仕事終えた後に飲むお茶のおいしさとか、
そのまま座布団を枕にしてうたた寝をする気持ちよさとか、
あ、畠関係ない。

第31話『のんびり馬車の旅～基本ゼイスさんは空氣～』

時は流れ今は夜中である。

僕とフェリシアは、所謂寝ずの番と詰つのをしている。
寝ずの番をするのは初めてなので、フェリシアもいる。
ゼイスさんとの交代までは、まだ一時間もある。ゼイスさんは今
うちに寝ている。

「星が綺麗」

「あ？」

「うん」

見上げる空には満天の星空と満月。

こんな景色は、日本ではなかなか見れなかつた。（見たことが無い
訳ではない）

「日本ではね、電気、科学の力で街に光が溢れてたからね、星が見
えなかつたんだよ」

「いいじゃない、ソレも綺麗なんじゃないの？」

「綺麗つちや綺麗なんだけどね、そこにずっと住んでると飽きたや

「みよ

「贅沢な悩みね、こっちなんか夜なんか暗くて勉強できないわよ」

「じめん」

「まあ、カオルが古代語を教えてくれて、
く魔法陣魔法の新しい使い方を見つけてくれたから、
これからは夜でも勉強できるけどね」

「そうだ、こっちには街灯とかある?」

「主要な町にはあるわよ」

「ソレはどうやって光ってるの?」

「勇者の魔法」

「え?」

「正確には勇者の魔法の欠片」

「うん?」

「簡単に言つと勇者が莫大な魔力を込めてく発光の魔法を使った
のを切り分けたの」

「魔法を切り分ける? 魔法つて切れるの?」

「普通は切れないわね・・・」

「じゃあ、普通じゃなかつたら切れるの? 魔剣か何か?」

「・・・ そうよ、つていうか良く分かつたわね」

「僕の友達に、そういうのが居るから」

「魔剣を使えるって、どんな友達よ」

「どんなって、そう言われても・・・ 幼馴染としか言ひよう
が無いなあ」

「・・・・・おさつ! ?ええええええつ! ?」

「そんな驚かなくて! も、こっちじや魔剣なんかそれなりに在るんじ
やないの?」

「在るわよつ! ! 在るけどつ! !

魔剣つて其々が意思を持つていて、選ばれた者しか使うことが
できないし、

そもそも魔剣に触ること 자체が無いに等しいし! !

「ああ～～～そうだ、魔剣つて危ないでしょ、使用者の登録とかしてる?」

「私のテンションは無視!？・・・そうね、魔剣は殆ど登録されてるわ」

「殆どつてことは、何本か登録されてないってこと?」

「そうね、遺物としてどちらの大陸も躍起になつて探してるわ」

「その中に喋るのつてある?」

「ん～～～～・・・・・あ、あるわ!！」

「黒くて柄に宝石が埋まってる?」

「そうね、つてこやこやこやこやくらなんでもソレは無いでしょー！」

確かに、見つかってないけど、カオルの世界にあるわけないでしょ

よ
「僕がここに居るのにそれを言つかなあ？」

「う～～～～、ソレを言われると反論できないわね」

よし、これで僕が元の世界に帰る希望がまた増えた。
あの喋る魔剣がこの世界の物かは分からぬけど、
アレがこの世界の物だつたとしたら、この世界から魔法を使わない
でも、
元の世界に戻る方法があるのかもしれない。
あくまで、かも、だけど。

とまあ、何だかんだ話していると、フヨリシアが急に黙った。

「どうしたの？」

「魔物よ」

「どう？」

「セー！」

ナニかが僕に飛びかかってきた。

「わきやーー？」
「カオルーー！」

フェリシアがアタフタと魔力を練り上げている。

「く火・・・」

「待つて!! フェリシア、それだと僕も・・・!!」

「球・・・!!」

「く展開・・・!!」

僕は咄嗟に「魔法陣」を「展開」した。

僕に、正確には僕の抱えている魔物に向かってくる火球は、僕にぶつかる前に消え失せた。

「ああ、カオル!! ってあれ?」

「危なかつたあ〜〜〜、死ぬかと思つたあ〜〜〜」

「今、何が? つてそれよりも魔物!!」

「この子の事?」

「ソレよ!! 早く離しなさいカオル!! 魔物よ危ないのよ!!」

「そう?」

僕の手には今、小ぶりなメロンぐらいの大きさの兎がいる。角が一本生えているから、やっぱり普通の兎ではなく、魔物だ。

それも、今日の午後にフェリシアが倒した一角兎の生き残りだろう。晩ご飯のシチューになつた一角兎は、僕の腰ぐらいの大きさがあつたので、

「この子はまだまだ子供なんだろう。なによりも、カワイイ！！もつふもふ、もつふもふだ。ソレはもう、触っているだけで心が洗われるような、さわり心地はまさに、天使の産毛とでもいえると思う。もう逆に、産毛まみれの天使だ。・・・うん、ソレは嫌だ。もうこの子を離したくない！！」

「大丈夫、この子は危なくないよ」

「何故そんなこと言えるのよ」

「ん？ 君は危ない事する？」

「キュイ？」

「ほら」

「何がほらよ、魔物に人間の言葉が通じる訳ないじゃない、危ないから、カオルその子を離して、お願ひ」

「イヤ」

「離して」

「どうしても、ダメ？」

「うつ・・・仕方ないわね」

「やつたー」

「キュー」

「でも！..」

「にゅ？」

「キュー？」

「カオルが怪我するような事があつたら、その時は・・・分かつたわね」

卷之三

卷之二

一待て！！いくらなんでもギヨー太郎は無いわカオル

「口變ししゃんギー」太郎

「あなたはソレでいいの？」

二
七
?

「分かってないみたいね、カオル、この子の名前は私が決める」

• • •

卷之三

「……じゃな、クルテン、可憐にわ

「それに心なしか美味しそうだよー！」

新編　古今圖書集成

「ヰヰイ！」

「そこで鳴くんだーーー！」

タリトシノツトキノタメ、田から利があなたのツトキでござるが如れ。

クルトンが仲間になつた。

第32話『真夜中の襲撃』（前編）

遅くなつてしません。

ヒツミ君の話ですがヒツミ視点ではあつません。

第32話『真夜中の襲撃』

男は夜の街を駆け・・・ではない。徒歩である。

夜の街を走るなど、どこからどう見ても不審者のする行動である。服も普通の服である。まあ、普通の服と言つてもそれなりに金のかかつた服である。

今から行くところには、それ相応の服装をして行かなければならぬ暫く街灯のともった道を歩き、田的通じる門の前に着く。門には夜勤の兵士がいる。

「身分証を見せてもらひつか

「これです」

男は身分証を渡す。

「つむ、確かに身分に偽りはないようだな、通つていいぞ」「お勤めご苦労様です」「お互い様だ」「お互い様だ」

男は兵士の労をねぎらい、堂々と門を通り、

城内に入り、防衛のために入り組んだ廊下を通り、目的地の扉の前に立ち止まる。

「今からお前を殺すが、許せ」

これは、男が“仕事”の時に言つ、言わば矜持の様なものだ。改めて目標に関する資料を思い出す。

資料には写真（魔法で撮られた物）があつた。

目標の特徴は、この国、いや、この大陸では珍しい黒髪黒目。顔は、彫りの浅いまだ幼さが多く残る顔、しかしその目に映るのは深い絶望。

男は仕事柄そういう目をしている者を見ることは多かつた。しかし、今回の目標の目に映る程では無かつた。

気持ち悪い。男は素直に気持ち悪いと思つた。

どうすればこの年齢でそれ程の絶望を体験することができるのか。何故ここまで生き続けることができたのか。何故それでも生きているのか。

いやいや、これから自分が殺すのだから、そんなことを気にする必要はない。

そう男は気を取り直しノブに手を掛ける。

なるべく音立てずに暗い部屋の中に入る。

目標がベッドに寝ているのを確認する。

男は資料に間違いが無い事をひとまず安堵する。が、油断はしない。

目標と指定された者が、自分に対する刺客といつ場合も無いではな
いのだ。

目標は規則正しい寝息を立てている。

ベッドの傍に立ち、男はナイフを抜く。

そのナイフはわずかな光も照り返さないよう黒い塗料で塗られて
いる。

男はナイフを首筋に、喉笛を絶つよつて一閃する。

まだ切つた訳ではない、一撃で確実に仕留めるためのデモンストレ
ーションだ。

そうして、最後の確認をした男はナイフを振りかぶり・・・

「ぐえつ！？」

変な声が聞こえた。

目標の喉笛を絶ち切るはずだったナイフを見る。

「濡れていなー！？」

男はすぐさま、逃げようと身を翻す。

“仕事”は失敗だった。目標は生きている。理由は分からない。
そう遠くない扉のノブに手を掛ける。

「開かない！！」

「ああ～～～このドア、建付けが悪いんですよ～～～」

男の切迫した声に、間の抜けた声が答える。

「建付けが悪い、だと！？」

そんな原因で捕まりたくない、男はそう思った。

「そ、建付けが悪い、無理に出ようとしたら大きな音がして隣の部屋の人気が起きちゃうよ」

「ならば窓から！？」

「うんうん、そりゃ 窓から出ようとするとね～～～」

「この部屋・・・ 窓が無い！？」

「いや～～～いい反応～～～おじさん那人に成れるよ」

逃げられない！…男は焦った。

何でこうなった！！

「あ、『何でこうなった?』って思つてゐるでしょ
「……いや、思つていない」

凶星だったが、男は虚勢を張つた。

そう言いながらナイフを目標に向ける。

「逃げれないから、僕を殺して、ゆっくり帰る?」

「そうだ」

「僕は叫べばいいだけだよ?」

「叫ばないだろ?」

「うん」

「じゃあ、すぐに終わらせてやるから大人しくしていい」

「いや

「そりゃ、まあ関係ないがな・・・・・はつ!」

男は、目標の目に向かつてナイフを突き出す。

「おつとお
「そういえば、さつき何故ナイフが通らなかつた?」

「直つと通つ?」「…」

「それもせうだなつ…。」

男は、田標の腹に蹴りを放つ。

「うつ…！」

「ナイフは通らなくとも、衝撃は通るのか

効くと思わず放った蹴りだったが、どうやら効いたようだ。

「いつたあ～～～、そういうえば、おじさんって殺し屋?」

「いや違う、何でも屋だ、金さえ払ってくれれば何でもする」

「そう、じゃあ今回のコレも依頼主の金払いが良かつたから?」

「ああ、前金で金貨五十枚、依頼成功で金貨百枚」

「じゃあ、僕がそれ以上払うって言つたら…・・・僕を殺さない?」

「そうだな、無理だと思つが

「出来るよ」

「何、だと?」

「出来るよ、ね?『最強』さん

む、呼ばれたか。

ここまで長かつたぞ、そもそも私は語り手をするのは好きではない。
ならば、登場ぐらいは派手にやらせてもいいっー！

「呼ばれて飛び出て華麗に見参ーーみんなのアイドルーーみんなの
勇者ーー！」

弱者を助け、強者も助け、悪を撃ち、正義を助くーーただし有料
ーー！」

光賀 光、美麗に顯現ーー！」

小規模な爆発とともに決め台詞を言い放つーー！

「長いし、煩いし、ゴロが悪いーーしかも金取るんだーー！」

「それはそうだろう、金が無いと何も出来ん」

「・・・・・」

男は啞然としている。

まあそういう、私は天井に立っているのだから。

「おい、畠山としているといひ悪いが、戻つて来てくれ

でないと話が進まない。

第33話『回想～メイドをと～』（前書き）

ヒツリ視点、相変わらずキャラが定まらない

第33話『回想～メイドさんと～』

さて、何故あんな事になつっていたのかと言つと、話は数日前まで遡る。

仕事をしようと王に命令された自分は、メイドさんや執事さん（使用人と言うのか？）たちと一緒に、この城で言葉を覚えながら（『最强』さんの「言語理解」の魔法で言葉は分かるものの、この魔法が解けた時、もしくは魔法無しでも会話出来るように）働くという流れになつた。

まあ、それが数週間前の話である。

なんだかんだ言つても、ここ的生活には慣れてきた。

『人は慣れるものである』昔の偉い人が言つていたような気がする。それには自分も、大いに納得できる。

いやむしろ、それ以外なんだって言つんだ。

自分の人生、慣れなかつたら即アウトな人生だつた。

各国のマフィアに潜り込んだ事もあつた。

絶海の孤島で殺人鬼と一緒にサバイバルした事もあつた。

超高層ビルのエレベーターでの超知能犯罪者と『冥探偵』の一騎討ち、

問題が出されて答えられなかつたら、エレベーターが落ちるというのもあつた。

ソレ等が、まだマシと言える人生だ。

たかだか異世界に飛ばされたくらい、大したことない。

「今日はここを掃除します」

「ハイ、分かりました。今日もフラフィーさんハ、お美しいテス
「全くそんな言葉ばかり覚えて、さつさと掃除を始めなさい」
「スミマセン、もうイチド、ゆつくり言ってクダサイ
「さつ・さ・と・掃・除・を・始・め・な・さ・い」
「ハイ！…分かりました…！」マイマスター…！」
「な…？ちょ…！…待ちなさい…！」マイマスターって何ですか…？」

カタコトの演技は忘れない。あとボケも忘れない。

自分に指示を出して下さった、メイドのフラフィーさん。

初めて見たときは艶のある銀髪かと思ったが、よく見たら薄っすら
と紫色な髪色。

目は大きくやや釣り目気味、鼻はそこまで高くないもののとても形
がいい。

唇は薄すぢず、厚すぢず。手足が長く、体の線が細く見えるが、弱

くは見えない。

胸は普通だ、だが全体のバランスが非常に取れているため、とてもカッコイイです。

アレか、いわゆる補正と言われるヤツか、登場人物全て美形なのか。

「何をジロジロ見てるんです？」

ゴツ！－つとホウキによる突きが額に突き刺さる。

いいッソミだー！だけどホウキは痛いから止めてー！

さて、眞面目に掃除するか。自分の任せられた場所は廊下。
城の掃除に当たつて注意すべきは、やはり豪華な調度品の数々だろ
う。

れるかもしね。

だが、傷を付けてもさつと、『最強』さんか『最恐』君が帰り方を見つけて、

さつむと元の世界へ帰るだらけ。

たとえ、『最強』さんや『最恐』君が帰り方を見つけられなかつたとしても、

『最強』さんが元の世界に居る『博士』に、『世界を複数人でも越えられるモノ』を

依頼しているので、元の世界で早く一ヶ月、

長くても三ヶ月もすれば造り上げてくれるだらけ。

元の世界で一ヶ月、こちらの世界での一ヶ月が元の世界での一週間だから、

単純に計算しても、一から四ヶ月で向こうの一ヶ月である。

長い、下手すると一年もここに居なければならぬ。

それ程の間、家（ボロアパートの一部屋）に帰らなかつたら、

大家さん位心配してくれるだらうか？

しないが、何日も居ない事なんかよくあつたし。

家賃もまとまつた金が入つた時—（『冥探偵』の『お供』としての仕事の報酬）に前払いしてゐる。

まあ、帰つた時の心配をしなくていいのはとても楽だ。

『冥探偵』との仕事は、沢山の金が入るもの、その度に死んだり、死にそうになるし、

帰つたら家が無くなつていたというのもよくあつた、部屋とか家とかが自分の所有物ではなくなつていた、ではなく物理的に、いわゆる更地、英語で言つならグラウンドゼロである。

グラウンドゼロ・・・中学生が好きそつだ。

はてさて、さつきから思考が脱線しつぱなしだ。

今は掃除だ、掃除。

大理石の様な石の壁を濡らした雑巾で、ん？雑巾？なんか汚そうだな。布巾で拭ぐ。

洗剤みたいなものが在れば良かったものの、生憎そういうモノは無いらしい。

コレもまた、魔法が発展している代償と言つやつだろつか。魔法、つくづくファンタジーだな。

自分に使えるだろつか？無理か？無理だな。うん、きっと無理だ。

『最強』さんは、『最強』さんだから魔法が使えたんだ。

徒然なるままに思考を垂れ流していたら、向こうの方から人が二人歩いてきた。

「アレは・・・大臣の息子と姫様です。やることは分かっていますね？」

「ハイ、アイアンクローですね」

「違います、何ですか？それは」

「間違えました、アイアンボムDEATHネ」

「一体何の事だかわかりませんが、発音が一部違うことを指摘しておきましょう」

「ム、このボケが通じないノデスカ・・・

「あなたは何がしたいんです?」

「漫才」

「今とてもいい発音でしたが、それを求めても何の得にもなりませんし、

今すべきことは全く違います」

「ハイ、分かっていまス」

「分かっているなら初めからしなさい」

「ハイ、スマセソでした」

「うん、よろしい」

「ところで、何をするの?スカ?」

ダンッ!…と勢いよく突き下ろされるホウキ、そしてその先には

「ツー?足がつ!…足があああああ!…ただのボケなのにいいいいい!…」

第34話『回想～登場～…お転婆姫～』（前編）

なんかヒツリ君がただの変態になつた気がする。

第34話『回想～登場～お転婆姫～』

とまあ「冗談」（？）はさておき、無駄な会話をしていくものの廊下は異様に長い。

今の会話もほとんど向こうには聞こえていないだろ？
する」ととは、掃除していたのを素早く片付け、礼をする」とである。

やはりこちらの世界でも、礼をする時の角度、姿勢等、厳密に決まつていてるらしい。

腰を折る角度は30度とかそんなんである。充分。きっと。
うむ、自分の記憶ですら曖昧だ。

「早くしなさい、敬礼です」

「ハイ」

敬礼とは、あの手を頭にビシッとする奴じゃない。

アレは軍隊の敬礼だ。こちらの世界でも軍隊の敬礼は手をビシッとする奴だ。

コレもまた勇者サトーの残したモノである。
何やつてんだサトー。

メイド、執事など使用人の敬礼は、いわゆるジャパニーズの
I G Iだ。

何やつてんだサトー！

「はあ、はあ、はあ」
「どうしたんですか？」
「イエ、別に大した事ありません・・・」
「そうですか？ならいいんですけど・・・」
「チヨツト、お辞儀した時に見えるフランキーさんの足に興奮して
るだけですカラ」
「前言撤回します、歯を食い縛りなさい」
「エッ！？チヨツトマツ

急に暗くなる視界、顔に感じる柔らかい感触、これは・・・手か。今自分は、アイアンクローラーをされているのか。

「フツ、アイアンクローラーさうじやワターシは倒せませんよ」

「四つ、言わせていただきましょう。」

まず一つ、何様ですか貴方は。

二つ、これはアイアンクローラーと言うのですか、初めて知りました。
三つ、それにはまだ終わりじゃありません。

四一 遺言はありますか？

「ナン・・・つておいしいよね」「遺言はそれでいいですか?」

「い・い・く・く・ない！…良くない！…死にたくない…」

「もう、遅いです。さよなら」

そう言い終えると、自分の顔にかかっている圧力はさらに強くなる。

「ぐぎー！？頭蓋骨がつ…ミシミシッ言つてゐつ…？」

「痛い！…猛烈に痛い！…！顔が取れる…！」

だが、それで終わりではないのがフラフイーさん。
何所にそんな力があるのか問いたくなるような腕力で持たれている
顔に、新たな力が掛かる。

その力とは、顔を支点に下に掛かる重力。

そう！…自分は今持ち上げられているのだ…！

それはもう、手足がプランプランするぐらいだ。

そして、この状況ですんなり降ろしてくれるほビフラフイーさんは
優しくない、

ならば、残る選択肢は『叩き付けられる』のみである。壁か、床に。

「さつき磨いたバカリなので、壁はやめて下さイ」

「却下します、今から床と壁が汚れますが貴方が掃除しなさいね」

「両方！…待つて…・・・ガツ！…」

壁に叩き付けられ、目の前に星が飛ぶ。

ここで『待つてくれ話せば分かる』と言おうとしていた、自分のネタに対する執着に驚く暇もなく、壁から離れる。

世界が回るような感覚と、風を切る音が聞こえ、瞬間床に叩き付けられる。

そして、流れるような攻撃をしたであろう、フラフィーさんのスカラト際のキワドイ所を見たのを最期に、自分の意識は途切れる。

ここからは三人称視点でお送りいたします。

なんてね。

だけど立てない、後頭部に致命的なダメージを受けた直後で立てる程、自分は頑丈ではない、だが、意識が途切れるのが一瞬だけというのは、やはり自分も人間離れしている証拠なのだろう。

「・・・ぐ・・・」

まさしく、グウの音も出ないとはこの事か。いや、違うか。手足の先の感覚が無い、もしかしたら神経がイカレているのかもしない。

ふむ、死なない程度に痛めつけるとは、フランキーさんもなかなかやり手である。

もしかしたら、フランキーさんはとても強いのかもしない。いやいや、『かも』じゃないな、フランキーさんは確実に『強い』それも、自分の知る中でもトップクラスである。もちろん、トップは『最強』さんだ。

「ちょっとあなた！…何やつてんのよつ…！」

「これはこれは姫様、少し不屈き者に教育をしてたままでです」

「これが教育！？教育ですって！？あなた良くそんな事が言えるわね！…！」

ああ、こんなにも血が…！死んでるんじゃないでしょうね「…！」

！」

「それは大丈夫です。人も強さを見抜くほどの『眼』は私も持つておりますので」

「でも！…」

そこに聞こえてきた勝気な声、自分は今うつ伏せに倒れている。（床に叩き付けられたときは仰向けだったが、今は通行の邪魔になるかなんかで、端にだけられているのだろう。）なので、姿は見えないもののフラフィーさんが『姫様』と言っているから、この声の主は『最強』さんが以前言っていた『お転婆姫』なのだから。いやはや、流石である。あのフラフィーさんに口答えするとは。突然話が変わるが、この城の中のパワーバランスの話をしようと思う。

この城の中で今知る中で、力を持つているのは『勇者』であり『最強』である光賀さん、持っている力といえばそのまま『最強』な力と『勇者』に関するネームバリューがある。

『王様』であるアビヤヌス・ソロモン・サトーは、まんまこの城一番の権力者だ。

『騎士団長』であるセマクヤ・タルタク・アクシャフ、『騎士団』と付いてはいるがこここの騎士団は戦力を王に集中させないために国民に忠誠を誓つていてるとか。

国民の代表である『大臣』達、国民達による選挙で選ばれた『議員』達から更に選ばれた者。

そして最後に『メイド長』であるフラフィーさん本名フラフィール・ルル・ルラード、曰く『国内最古にして最強』だと、曰く『勇者サトーの最も近くに居た者』だとか。

うん、二人ぐらい呼び名に『最強』の文字が入ってる。絶対おかしいよね【レ】。

勇者サトーの最も近くに居たって、フラフィーさんは何歳なんだ？とか聞いたら確實に殺されるよね。

そんなフラフィーさんに口答えするとば、『お転婆姫』もなかなかやりおる。

「大丈夫！？」

そう言って抱えあげられる、お姫様に抱っこされるコレもまたお姫様抱っこである。

くだらねえ、もう一度自分に言つ、くだらねえ。

「ええ・・・まあ・・・死ぬほど痛いですガ」

「もうちょっと我慢してね、今すぐ治療術師のところへ連れて行ってあげるから」

本当に、『お転婆姫』なのか？『最強』さんから聞いていたイメージと合わない気がする。

第35話『回想～海草と海藻は別物である～』（前書き）

遅くなつてすみません。

ヒフミ君視点、なんか最後にヒフミ君は云々書いていますが、特に意味はありません。

第35話『回想～海草と海藻は別物である～』

「それで？あなたは何故あんな事になつてたの？」

「？」

あんな事？何の事だらうか？

それより今の状況を話しておこひつか。

誰にだつて？ふん、そんな事は分かり切つているだらう。

そう！君たちにだ！！

(へんなやごよ、ヒツリ)

(どうこうテンションなの?)

(つてこつか知つてるよ、ちつと見てたし、何でそんなこと聞いつるだ?)

え？ さうでもしないと『みんな』の出番が無いかもしれないと思つて。

(あー！本当に今まで全然出番なかつたー！)

(意外と真面目な答えが返ってきてびっくりしたよ)

(そんな事心配しやがって、俺たちは導入のためのキャラ、もしくは要所要所で出て来るようなキャラ　だから、そんなに出なくたつていいんだよ）

まあ、そんなこと関係なく説明はする。

今、自分は医務室の様な所に居る。さつき、フライさんのアイアンボムによつて出来た傷を治療するためだ。それで、治療、魔法医者？治療術師？というのだろうか？『く治療』おおおおおおお！』と叫んでいたので治療術師だろう
受けていた。そこには、ここまで自分を運んで来た『お転婆姫』もいる訳で、今はこの部屋に居た治療術師でさえ退出させられ、何故か自分は尋問を受けているわけだ！！
どうだ！！分かつたか、この野郎！！

(だから、知つてゐつて)

(だから何なの?そのテンション……)

(もう、面倒臭えコイツ)

「ああ、あなた言葉が分からぬんだつけ？」

「ハイ！！」

「そんな自信持つて言われても困るわよ

「ハイ！！」

「ちゃんとしたこと分かってる? 分かってないんだつた、はあ」

「ハイ!...」

「あなた、ホントは分かってるんじゃないの?」

「ハイ!...」

「・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・ヤバ」

「・・・・・ヤバって、まさかあなた・・・」

しまった!! ノコと流れで「はい」と叫んでしまった!!

(ねやどじだ)

(ゼッタイにワザとじだ)

(お前・・・・・どうすんだよ・・・・俺等なんもできねえぞ?)

マジで? 本当になんか出来ない? 記憶の消去とか・・・あの世的特權
で、
だって『みんな』ってなんか、お偉こわえんじょ?

(え? そんなこと叫んでたっけ?)
(何でそのこと知ってるの?)
(まさか・・・バレていたのか、俺が宴会部長だとこいつ! とか)

無理にボケ盛らなくていいから、言ひてたじゅん『最強』さんに自己紹介した時に。

(・・・確かに言ひてたね)

(でもダメだよ)

(そういう決まりだからな、甘えんなカズ)

出来るには出来るんだ・・・。

うん、分かった、自分でどうにか誤魔化す。

(そもそも自業自得だからね?)

(エンマさんも気のいい人だけど、甘やかしたりしないからね)

(そういう、可愛い幼女だしな)

そんな情報いらないよ・・・え? 幼女? カワイイの? 年齢は?
見た目小学校高学年以上は、幼女とは認めないからね?

(めっちゃ食いついた！－)

(食いつかなくていいから！－ひーちゃん、私たちと会つてない間に何があつたの！？)

(まさかここまで食いつくとは思つてなかつた・・・いや－－今はそれよりも姫さんだ、
変な間が空いてる－－)

う・・・うん分かつた、後でどんな子か聞くからね？

「アー、イエース、アイキャンスピークリング」

(なぜに英語)

(しかも、今の英語的にはおかしいしね)

(反応はどうだ？)

これで誤魔化せたか？

「ふざけないで、あなた、言葉、話せるのね？」
「・・・はー」

誤魔化せなかつた！！

「それで？何で話せる」とを隠してたの？」

もう隠せないか・・・仕方ない、話すか！！仕方なくな！！

(うわあ～～～嬉々としてるよ)
(それでいつも死にそうになつてゐるのに)
(お前さあ、いい加減止めるよやうこうの)

何を言つて……自分はエムなんかじゃない……ノーマルだ……

(そんなこと言つてない！！)
(もう疲れたよ、ひーちゃん)
(マイシのいつこひ性格は昔からだ、諦めろ)

「話せるとなると、面倒な事になりそだからです。

それと、今話せているのも魔法のおかげなので、

魔法なしでも話せるようにと勉強しようと思いまして」

「それが理由？何故面倒な事になると思うの？」

「『最強』、いや『勇者』で通りますか？」

「↙召喚↙された彼女達の事？」

「そうです。私もその↙召喚↙で呼ばれたんです

「知ってるわ」

「なら、大体分かるんじゃないですか？」

「うん？・・・分からないわ、どう言つ事？」

ホントにこの人『お転婆姫』か？なんか凄い大人しいけど。あとち
ょっとバカっぽいけど。

そういえば名前、聞いてない。ま、いいか後で。

「では、『勇者』の特徴を上げてみてください」

「特徴？綺麗とか、カッコイイとかそんなの？」

「はい」

「綺麗で、カッコよくて、スタイル抜群で、手足が長くて、胸が大きくて、

でも、その胸もただ大きいだけではなくて、形がとてもいいわ、
それに顔も、もし天使と会ったことがある者が居るとすれば、
十人中十人、

違うわね、十万人中一二万五千人の人が天使だと言つでしょう

ね

「それもそうですが、もつと他の事です（一万五千人どつから出て

来た）」

「とても強くて、頭がいい？」

「では、どう強いでしょうか？」

「あなたちょっと、私の事バカにしてない？」

「バカになど（ちょっとしか）してませんよ、どう強いでしょうか？」

「力が強くて、剣術もとても強くて、とても速くて、どんな魔法でも使える」

「そうです、魔法です」

「魔法？それがあなたにどう関係あるの？あなた魔法は使えないんでしょうね？」

「ええ確かに、全然使えませんね」

「じゃあ関係ないじゃない」

「それが、そうじゃないんですよ。姫様は、魔法使えますか？」

「そんなの当たり前じゃない」

「では、魔法はどうやって使いますか？」

「＜詠唱魔法＞なら魔力を練つて、起こすことをイメージして、

それに合つた古代語を言つ。＜魔法陣魔法＞なら、＜魔法陣＞

を書いてく起動＞する

「その通り！」

「これくらい、基本中の基本ね。でもこれがどう関係するのよ？」

「そのどちらにも必要なものが在るはずです」

「そんなの、魔力と古代語に決まってるじゃない」

「はい、その通り、正解です。ヒューヒューーー！」

「絶対バカにしてるでしょー！」

「とまあ、姫様を小馬鹿にするのは止めて・・・」

「やっぱりバカにしてた！！あなた、許さないわよーーー！」

「まあまあ、そんなこと置いといて、では、私たちの出身は？」

「そんな事！？人を馬鹿にするのがそんな事ですってーーー？」

「ほら答えるーーー早くーーー！」

「えへ、うへ、うへとおへ・・・・異世界ーー。」

「もつと詰かくー！」

「うう・・・に、二ホン?」

「正解……では、そこで語られてる言葉は？」

「そんなの、分からぬわよ・・・・・・二ホン・・・語?」

「正解！…あと一息！最後に、日本語と魔法の関係は？」

良く考えて!!

古文語

二赤シ語・・・語?・・・先しかして、言葉?・・・古代語ビ

ホン語は同じ?

「アキラ?」

「元」

「黒い一匹が今更つづいて、ヤツ同様に八縣二十州へ

卷之三

「六」

卷之二

「一」二二二

月は

「」

せんね

「ええ！？」

なにも、ないな。・・・・・うん、ない。よし、帰るか！！

(血の)掃除もしないといけないし。

あ、名前聞いてない。まあいいか、フラフイーさんに聞けば。

「では、これにて失礼させていただきます」
「ちょ、ちょっと待って…！」

掛かった！！

「何でしちゃうか？」

(じつして、また一人、犠牲者が増える訳か)
(ひーちゃん、物凄くいい笑顔してる)
(ホントこえーよな、カズつて)

第36話『海藻へ間違えた、回想』

「ちよちよちよちよちよつと待つて！…」

「何言つてんのあなた？」

「いえ、少しふざけただけです・・・・・それで、何でしょうか？」

「あなた、私と手を組まない？」

ホイ來た、直球ど真ん中！－！

「手を組むとは？」

上手くいきすぎで、笑いそうになるのを堪えながら言つ。

「私付の使用人になれつてことよ、後何一ヤ一ヤしてんのよ
「つ！？・・・・・すいませんつい、思い出し笑いで
「思い出し笑い！？この状況で！？」
「すいませんッブツククツアハツアハハツフウ――ハハハハ

ハハハア！！

「すいませんと言いつつ大爆笑！？しかも最後悪役笑いだし！！！」

「ふむ、それで？」

「切替早っ！！それでって何よ？」

「姫様付の使用人になることで、私に何のメリットがあるんですか

？」

「う・・・うん・・・それは・・・」

やつぱり考えてなかつたか、ならまだ隙があるな。
ここでの姫様側のメリットは、自分の秘密を知つていいという事、
それに自分から日本語を教えて貰えるという事だ。

「なら、私から条件をお出ししましょ。ソレを守ってくれるならば、姫様の使用人になりましょ」

「条件？」

「きっとこの国には、王族、もしくは王族の認めたものしか入れない場所が在るはずです。そこに自由に、とまではいいませんが、入る権利を頂きたい」

「いいわよ」

「え？」

ダメもとで言つたのに偉くあつたり許可されてしまった。

「その代り私からも条件があるわ

なるほど、そいつ事か。

どんな一難題（面倒事）が待ち構えている？

「はい」

「私と一緒に学校に行つて……」

「はい？」

学校？何故？

「なによ……この条件が飲めないっていつの……！」

「いえ……分かりました。それでいいです」

「じゃ交渉成立ね」

そう言つて差し出される手。

「？」

「？一ホンには握手無いの？おかしいわね・・・あつたと聞いてる
んだけど」

「いえ！..ええ、ありますともーー！」

手を握る。

「よひじく

「ひじきりやひよひじくお願いしませう」

いやはや、自分には詩的センスが全く無いものだと想ひナビ、『お
転婆姫』の笑顔はとても明るく、向田葵の様だった。
あ、名前聞いてない。

医務室から出ると、病院の待合所に在る様な長椅子に、大臣の息子
さんが座っていた。

「あら、待つていてくれたの？」

「当たり前です！！」

「別にもう帰つてくれても良かつたのに・・・・」

「そんな事出来ません！！こんな得体の知らない奴と姫様を一人きりにして置いていくなんて！！」

そう言つて、まるで親の仇を相手にするかの様なもののすごい形相で睨んでくる大臣の息子、え？何で？何でそんな睨んでくるの？確かに得体のしれない奴かもしれないけどさあ。

「そんな顔しないで下さいよ、大臣の息子さん、綺麗なお顔が台無しですよ」

息子をあえて強調したのは、彼が大臣の息子でしかない事を分からせるためだ。この国には貴族や世襲制などと言う制度は無く、あくまで実力主義である。それゆえに、・・・・・って言うかなんだかんだ言つても親が権力を持っていても息子には全く関係のない話なのだ。親が大臣や議員だと、親が仕事を居やすいように、城や議会会場近くの邸宅に住まわせてもらえる。ただそれだけの事だ。

しかし、王族は違う、王族はこの国の成人年齢より権力を持つている。

その代りに、王族はまだ小さな頃より国を治めるための教育を徹底的に受け、なおかつ国の現状を見るために、護衛はあるものの危険な旅に出たり、庶民の生活を知らなければならない、と言つ理由で農民や商人の家で暮らしたりしなければならない。言つちやえればそれだけの働きをしているのだ、この『お転婆姫』も、どれ位お転婆なのかも良く分からぬけど。

「くう……」

自分の意図する事が分かったのか大臣の息子さんは苦悶に顔を歪めている。

「ほら、私はこの通り大丈夫です。だから、心配しないでください」「ですが、姫様！！」「大丈夫です」「くうつ……お前、覚えておけよ……」

そう言って、どこかに去つて行く大臣の息子。

何でそんな捨て台詞吐かれないといけないの？自分別に大したことないよね？

それより一国の姫相手に挨拶も無しに帰るとか失礼じゃない？

「…………はあ」
「どうされました？」
「あいつ、メンドくさいよね、事ある」と、姫様、姫様！つて
「はは・・・それより、何で私に接するときは猫被らないんです？」
「あんた相手じや、多分猫被つても無駄かと思つてね」
「それはそれは、光栄の極みです、姫様」
「まつ、またバカにしてる！牢獄にぶち込むわよー！」
「お～それは怖い、失礼いたしました、姫様」
「治す氣無いわね！それに、私にはエレアノール・アビヤヌス・
ソロモン・サトーって立派な名前が あるのー！姫様なんて呼び方
やめてー！」
「エレア・・・trecht！呼びづらー！もう、略してエアソーサーで
いいですか？」
「あんたって本当に無礼ね、それだと空氣混みたいな感じになるか
ら止めて」
「じゃあ、エア」
「空氣になつたー！」
「H」

「もう、名前なのか文字なのか分からない……」

「E」

「ただの頭文字！！」

「まだ不満ですか、仕方ないちゃんと繋げますよ……E A S S、
I-E-Sでいいですか？」

「I-E-Sでいいですか？じゃないわよ……もう、普通に読んで普通
に！！」

「姫様」

「ああもう……振出しに戻った！！」

「天丼はお笑いの基本だよね」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3589s/>

僕達の異世界生活

2011年10月11日21時21分発行